

那珂 76

— 那珂遺跡群第156次調査の報告 —



2017

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区竹下三丁目地内における下水道築造工事に伴い行われた、那珂遺跡群第156次発掘調査について報告するものです。

那珂遺跡群はこれまでの発掘調査の成果により、北側に連なる比恵遺跡群と合わせて、弥生時代から古墳時代前期、および古墳時代後期から飛鳥・奈良時代において、福岡平野では最も大規模かつ中心的な遺跡群であったことが判明しています。特に古墳時代後期から飛鳥時代には、「日本書紀」に見える「那津官家」の推定地とされ、そのほか「筑紫大宰」との関連も評価される重要な遺跡です。

今回の調査において検出した飛鳥時代の井戸は、方形の板組井戸枠の最下層に砂利を充填しており、同時代の福岡では珍しいものです。このような構造をもつ井戸は、当時の大和や河内などの畿内中枢部ではみられるものであり、「那津官家」などに関連して、当地に畿内の文化の影響が及んだ可能性を示すものと考えられます。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術的な研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた調査委託者をはじめとする関係者の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成27年5月1日から同年7月31日まで発掘調査を実施した、福岡市道路下水道局による下水道施設建設工事に伴う、那珂遺跡群第76次調査の報告書である。
2. 検出遺構の呼称は記号化し、井戸をS E、竪穴建物（「住居」とは限らないので「建物」とする）をS C、土坑をS K、柱穴などピット状遺構（自然遺構を含む可能性あり）をS P、掘立柱建物や柱穴列遺構をS B、落ち込み遺構、造成遺構などの特殊遺構や性格不明遺構などをS Xとしている。
3. 調査区の座標系は敷地地形に合わせた任意座標である。ただし、国土交通省が公表している近隣の測量基準点から調査区内の任意座標測量基準杭に国土座標（世界測地系）を移動して、調査区内の国土座標上の位置を求めている（Fig.3・4）。本書の遺構図に用いる方位北は、多くの場合国土座標北（世界測地系）である。一部の個別遺構の実測図に磁北を用いている場合があるが（国土座標北から約6°40'西偏）、その場合は明記した（明記のないものは国土座標軸北である）。
4. 本書に用いる発掘調査時の遺構実測図の作成は、調査担当者の久住猛雄（当時、埋蔵文化財調査課）のほかカルロス・ペレッキア（当時、九州大学院生）、上方高弘（当時、埋蔵文化財調査課技能員）、田中康也、宮元亞紀世（発掘作業員）が行った。また遺物実測図の作成は、主に上方高弘（現、埋蔵文化財課技能員）が行い、久住（現、埋蔵文化財課）が全体をチェックし一部を修正加筆した。遺構図面の製図は、小畠貴子、増永好美、林由紀子（以上、埋蔵文化財課整理補助員）、久住が行った。遺物図面の製図は、上方、谷直子（埋蔵文化財課技能員）、久住が行った。
5. 本書に用いる写真は、自然科学分析の写真と遺物写真を除き、久住が撮影した。遺物写真は一部を除き井上蘭子（埋蔵文化財課職員）が撮影した。写真是全てデジタルデータのものを使用している。写真是報告書掲載にあたり、陰影やコントラストなどに若干のデータ調整加工を行っている。遺構写真については写真画像のオリジナルデータと対応するフィルム写真もあり、あわせて収蔵される予定である。
6. 表紙写真はSE006井戸枠・井戸側痕跡検出時土層状況（北西から）、裏表紙写真はSE006井戸側内最下層砂利敷層検出状況（北から）である。
7. 本書の執筆と編集は、自然科学分析委託を除き久住（現、埋蔵文化財課）が行った。自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社によるものである
8. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

目　　次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 周辺の地理的歴史的環境	2
4. 周辺の調査	10
II. 調査の記録	17
1. 調査の概要と基本土層	17
2. 検出遺構	21
(1) 井戸	21
(2) 溝状遺構	24
(3) 竪穴建物	29
(4) 谷状落ち込み（造成）遺構	31
3. 出土遺物	33
III. 自然科学分析	
・那珂遺跡群156次調査にかかる花粉分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）	36
IV. 調査のまとめ	40
1. 遺構の変遷と那珂156次調査の意義	40
2. 環境の変遷について	40
3. 井戸S E 0 0 6に関する考察～飛鳥時代の比恵・那珂遺跡群小考～	41
図版	45

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂一丁目地内および竹下三丁目地内における下水道築造工事に伴う「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書を平成27年1月5日付で道路下水道局から受理した（事前審査番号26-1224）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085）に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断した。工事予定範囲のうち、竹下三丁目地内の新たに下水道工事のための発進堅坑を掘削する地点については、工事が埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性があるものと判断し、平成27年3月11日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下60~90cm前後で中世とみられる遺構と遺物が確認されたことから、遺構（埋蔵文化財）の保全等に関して道路下水道局と協議を行った。

その結果、現地は東側道路面より約1m前後高く、下水道の雨水幹線築造のための堅坑の掘削工事を行うために工事対象地のほとんどを東側道路面まで切り下げる必要があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、切り下げ工事予定範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。また工事対象地はアサヒビール株式会社が土地所有者であり、同社博多工場の敷地内であることから、下水道工事に伴う発掘調査についての承認を得る必要があったが、協議によりアサヒビール博多工場の合意を得ることができた。これを受け、道路下水道局長を委託者とし、経済観光文化局長を受託者とする「埋蔵文化財発掘調査業務委託に関する協定書」を平成27年4月10日に締結した。また両者の協議により、同年5月1日から7月31日までを現地における発掘調査の期間とすることになった。

発掘調査は平成27年5月1日に開始し、同年7月31日に発掘調査を終了した。資料整理および報告書作成は、平成28年度に資料整理を行い、平成29年3月に報告書を刊行することになった。

なお発掘調査においては、アサヒビール株式会社博多工場および下水道工事受託業者には、深いご理解と多大なるご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

また、当該調査に関する基本情報は次頁上段の表のとおりである。

2. 調査の組織

調査主体： 福岡市教育委員会

調査委託： 道路下水道局

（発掘調査 平成27年度：資料整理・報告書作成 平成28年度）

発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成27年度）・

埋蔵文化財課（平成28年度） 課長 常松幹雄

埋蔵文化財調査課調査第1係長 吉武 学（平成27年度）

埋蔵文化財課調査第2係長 加藤隆也（平成28年度）

発掘調査および整理・報告庶務： 埋蔵文化財審査課（平成27年度）・埋蔵文化財課（平成28年度）

管理係 横田 忍

発掘調査および整理・報告担当： 埋蔵文化財調査課（平成27年度）・埋蔵文化財課（平成28年度）

久住猛雄

〈調査基本情報〉

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	156 次	調査略号	NAK-156
調査番号	1505	分布地図幅名	037 東光寺	遺跡登録番号	020085
申請面積	697.1m ²	調査対象面積	353m ²	調査面積	299m ²
調査期間	平成 27(2015) 年 5 月 1 日～7 月 31 日			事前審査番号	26-1-224
調査地	福岡市博多区竹下3丁目28番1				

3. 周辺の地理的歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央や北側にあり、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する (Fig.1)。南方の春日丘陵から北に延びる段丘は、那珂の南側に接する五十川遺跡付近で狭くなるが、北に続く那珂遺跡群では段丘の幅が広くなる。北側に接する比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは連続的な分布にあり、同一段丘上に立地する。特に比恵遺跡群は、那珂との間に鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や遺構変遷の様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている (田崎博之 1998 ほか)。比恵・那珂遺跡群は、中世以降の開墾や屋敷地（城館）の造成、近現代の区画整理（特に「駅南地区」の比恵遺跡群が顕著である）や都市化による地形の改変・削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多い。しかしながら、地点によっては多くの遺構が密集して遺存していることもある。周囲に比べて地形が高く残る土地や、逆に旧地形が低く削平度が少ない場合など、遺構の著しい重複によって遺構の平面プランが不明瞭かつ遺構の認識・検出が困難となり、「包含層」状になっている場合も少なくない。これは、確認（試掘）調査や本調査の遺構検出時においての要注意事項である。比恵・那珂の標高は、地形の削平部分も考慮すると最高所が 12 m 前後、低いところで 5 m 前後であり、一定の起伏がある。比恵・那珂遺跡群の範囲は、南北 24 km、東西 0.5 km から最大 1.0 km の 100 ha 以上に及び、特に弥生時代～古墳時代、飛鳥時代の遺跡としては全国的にも最大規模の部類に入る。本報告における周辺の地理的歴史的環境の叙述は、弥生時代から古墳時代前期について省略する。これらについては、福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下、「市報告」とする）那珂 68 次報告（市報告第 639 集）、那珂 73 次報告（市報告第 713 集）、比恵 100・102 次報告（市報告第 956 集）に詳述し、また弥生時代の比恵・那珂については別途論考をまとめたことがあるので参照されたい（久住 2008a・2009）。以下は、本報告の那珂 156 次で検出した、特異な構造を有する飛鳥時代の井戸や、それとほぼ同時期の堅穴建物、溝状遺構に関わる観点で、飛鳥時代（九州須恵器編年Ⅳ～Ⅵ期：小田富士雄 1964・1977、中島恒次郎 1997、舟山良一編 2008、長直信 2012）を前後する主に古墳時代後期から奈良時代前期頃（6 世紀～8 世紀前半）の周辺の遺跡と比恵・那珂の遺構の展開と動向について主に記す。

比恵・那珂では弥生時代中期から古墳時代前期前半まで大規模な集落が形成されたが（久住 2008a）、古墳前期後半には遺構が激減し、古墳中期の遺構・遺物は非常に少なくなる。しかし、古墳時代中期末（須恵器 TK23～TK47 期）に剣塚北前方後円墳が築造された前後から集落の再形成が始まる。6 世紀中頃（須恵器 TK10 期、九州須恵器編年Ⅲ A 期古相）には、三重周溝を有する大型前方後円墳の東光寺剣塚（墳丘長 74 m 前後、総長 117 m 以上）が築造され（市報告第 267・887 集）、その直後から比恵・那珂は再び大集落となる。6 世紀後半～末（九州須恵器編年Ⅲ A 期新相～Ⅲ B 期）には、比恵 8・72 次の三本柱柵列区画を伴う大型倉庫群が造営され、7 世紀第 3 四半期（須恵器 V 期 = 飛鳥 II 期新相～Ⅲ 期古相併行）まで存続したとみられる。この倉庫群と柵列区画は、『日本書紀』宣化天皇紀にある「那津官家」の可能性が

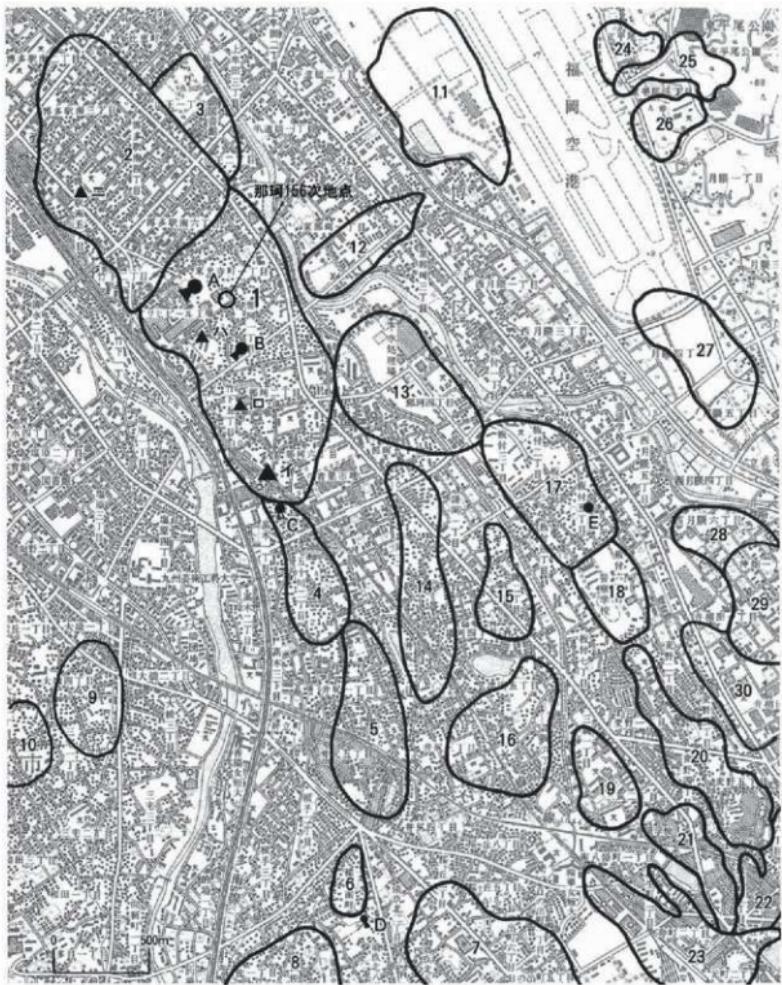


Fig1 那珂遺跡群の位置と周辺道路分布図 (1/25,000)

1. 那河道路群 2. 此恵道路群 3. 山王道路 4. 五十川道路 5. 井尻B道路群 6. 寺道道路 7. 頃庶・岡本古跡群 8. 口佐古跡群 9. 大橋E道路
 10. 三宅A道路・三宅寺跡 11. 三宅道路 12. 東那河道路 13. 那珂君休道路 (那珂源タマ, 那珂久平ほか) 14. 諸國A道路 15. 諸國B道路 16. 那河道路
 17. 枇杷道路 18. 高畠道路 19. 三笠道路 20. 安野A道路 21. 安野B道路 22. 安野C道路 23. 南八幡道路 24. 久保園道路 25. 常田大谷道路 (常
 田源満道路) 26. 井相田C道路 (24~26. 常田造跡群) 27. 下月隈C道路 28. 井相田D道路 29. 畠島道路 30. 井相田C道路 A. 東光寺御塚古墳 (6
 世紀中頃) B. 那河八幡古墳 (古墳時代早期~前期初頭) C. 今宮神社古墳 (前期古墳?) D. 須佐御陵古墳 (前期初頭) E. 板付八幡古墳 (6世紀後半)
 那河37・117次はか調査口、那河23・114次調査口、那河115次調査口、比恵8・72次調査分 (那河官家、因指定史跡)

*上図の道路範囲はおよその範囲を示したものであり、埋蔵文化財調査事前調査窓口における分布地図上の埋藏文化財位置の範囲とはやや異なる場合があり、また調査の進展により範囲が変動する場合もあり注意された。

評価され、同地点は国指定史跡として保存されている（市報告第116・663集）。比較的最近の調査により（比恵109・125次、市報告第1002・1237集）、史跡保存地区の南西側で同様な三本柱櫛列区画と大型の総柱建物（大型倉庫）群からなる遺構群が検出された。櫛列から想定できる方形区画の位置と方位は、8・72次と109・125次では異なっており、また隅角部が重複してしまう可能性があり、同時期ではなく前後する時期か、または一方が先に作られ、後から一方が加えて作られたという可能性が高い。109・125次の方は、北側の69次地点に関連遺構が無く、その手前で折り返し、およそ一辺50mの方形区画であろう。一方、8・72次は一辺64m前後の方形区画が予想できる。また125次では「高殿」的な建築様式である、屋外棟持柱付建物があり、「倉庫群」だけではない機能（居館・祭儀機能）も想定できる。125次櫛列区画の東端の三本柱が斜行し、調査区南東側に「突出部」を想定しうることも「首長居館」的な要素である。したがって、後の評（郡）衙正倉に繋がるような古代官衙倉庫群としてより洗練されて来ているのは8・72次の方で、遺構の様相からはそちらが後出する可能性がある。さらに、8次建物でもⅢA期新相相当の須恵器が出土しているが（市報告第663集第12図1.2）、ⅢB期やⅣ期も含む（同図3.4）。一方、125次の建物からはⅢA期新相相当の須恵器が複数出土している（第1237集第102図6、第110図10～12、このうち第102図6と第110図10.11は「高杯」坏部とするが、天地逆で坏蓋の誤認の可能性が高い）。すなわち建物群の成立時期と廃絶時期は、109・125次の方が早かった可能性が高い。ただし上記の考察は、8・72次の正式報告書作成と125次出土土器の再観察により今一度慎重に考察すべきところである。さらに、比恵・那珂の他の数地点（比恵39次・50次・109次、那珂18次・23次）にもⅢB～Ⅳ期の大型倉庫建物があり、複数の大型倉庫群が並立していたらしい。なお比恵7・13次の三本柱櫛列区画（市報告第117・596集）は正方位をなし、比恵・那珂遺跡群での傾向から7世紀中頃以降に下る初期官街遺構群の一部と見た方がよい（長直信2014）。その他、単独存在の特異な総柱大型建物が那珂68次にあり、大型倉庫か祭儀の「高殿」であったか検討をするが、飛鳥時代前半（Ⅳ期）と推定されている（市報告第639集）。この場合、周囲の遺構分布の中でその用途を考える必要がある。

那珂遺跡群では、「初期瓦」とされる特異な瓦類を含む6世紀末から7世紀後半ないし7世紀末の古代瓦が那珂遺跡群の複数地点で出土している（菅波正人1994、齋部麻矢1999、比嘉えりか2008）。22次では牛頭窓跡群神ノ前窓と同じ須恵器成形の「神ノ前タイプ」瓦が出土し（市報告第253集）、Ⅳ期古相（Ⅳ-1・2期、600年前後～7世紀第1四半期頃）の土器を伴い、九州最古の瓦の一つとされる。「神ノ前タイプ」段階の須恵器成形瓦と、桶巻技法など通有の瓦製作技法を導入した、より瓦らしい瓦として確立した次の「月の浦タイプ」までを出土した23次の溝は（市報告第290集）、近年の114次の成果から（市報告第1082集）、大型建物を伴う一辺90mの方形区画の西辺になることが判明した。6世紀末から7世紀中頃（Ⅳ期新相：Ⅳ-4期まで）の初期官街遺構であろう。23次の区画溝外側西方には倉庫群がある。「官衙」とした場合、「評」制（近江令＝670年）以前であり、その位置付けが課題である。23次の溝は最下層がⅢB期に遡り、「神ノ前タイプ」が伴う下層はⅣ期初頭、「月の浦タイプ」が伴う上層はⅣ期新相～V期、最上層はVI期である。114次では、方形区画内北側に大型掘立柱建物2時期分の柱列ないし建物（SB2070、SX2080）が検出されている。方形区画溝も114次では掘り直しが明らかになった（長直信2014）。また114次の区画溝は東辺に途切れている箇所があり、出入口施設が存在した可能性が高い。その東側には、那珂地区では古墳時代初頭に造営された「道路」遺構が存在する（久住1999b・2008）。この「道路」は、古墳時代後期から飛鳥時代前半期に側溝が再掘削され、再利用された可能性が高く（久住1999b、市報告第639・713集、長直信2014）、この方形区画も方位をそろえている。ところが114次の方形区画溝には初期瓦が少しか出土していない。一方、23次の溝SD89には初期瓦が多く出土している。これは、23次に近い方形区画内西側に瓦葺きの「主殿」が存在したこ

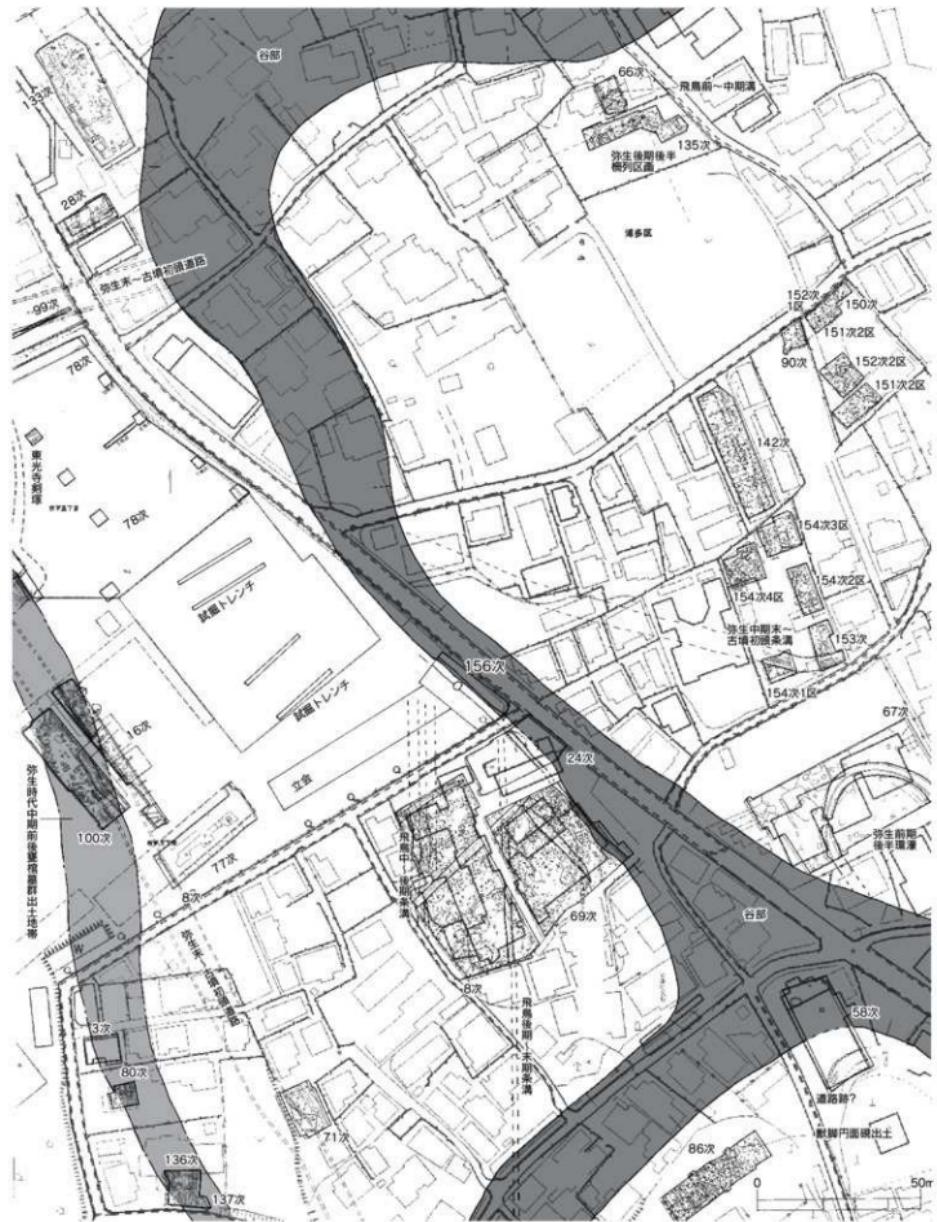


Fig. 2 那珂156次調査地点と周辺の調査区位置図 (1/1,500)

とを示唆する（長直信 2014）。出入口施設は「道路」側の東なので、この初期官衙では、「東面」する主殿であった可能性がある。

その他、那珂の南端の 37・51・56・117 次でも 7 世紀中頃～末（IV 期新相～VI 期）の大型建物ないし二本柱構列が検出されている（市報告第 366・525・500・1034 集、菅波正人 1996）。那珂 115 次では、Ⅲ B 期以来の堅穴建物や掘立柱建物の集落の展開の上に、途中から大型掘立柱建物に変遷することが確認され（市報告第 983 集）、さらに建物が正方位化する IV 期新相（IV～3 期以降）からは初期瓦が出土し、そのうちの IV 期最新相～V 期の大型建物 SB01 は初期瓦を伴い葺いていた可能性がきわめて高いと推定される。調査区内では、畿内系暗文土師器坏も出土しており、畿内中枢（飛鳥）との関係が示唆される。これまで那珂の初期瓦については、堅穴住居出土例もあり（13 次・32 次・62 次など）、堅穴住居に使われたという意見さえもあったが、115 次で瓦が確実に伴う大型建物が検出されたこと（IV～4 期～V 期 = 7 世紀第 3 四半期）、23 次・114 次の初期官衙方形区画溝内西側に瓦葺き建物を想定できることから（前述）、相応の建物に瓦が葺かれていたと判断してよいだろう（注 1）。牛頭窯跡群の須恵器窯で初期瓦が焼成されているが（齋部麻矢 1999、比嘉えりか 2008、舟山良一編 2008）、その主要かつほとんどの消費地は那珂の初期官街遺構群である。115 次では、初期官街の可能性がある建物群は、IV 期新相（7 世紀中頃）以降に正方位を指向するという変遷が明らかになった。比恵・那珂全体としては、地区により正方位化の細かい時期の相違がありそうであるが（一部は IV 期新相から）、V 期（およそ 7 世紀第 3 四半期後半）までには全般的に正方位化して入る可能性が高い。これに関連して、那珂遺跡群だけでなく南に接する五十川遺跡や井尻 B 遺跡でも、V 期以降、特に VI 期（7 世紀第 4 四半期～700 年代頃）後半の遺構の多くが正方位を指向し（井尻 B 22 次報告、市報告第 923 集）、7 世紀後半から 8 世紀初頭における広域の正方位地割と計画的な官街城形成を予察する意見もある（吉留秀敏 2009）。

このような初期瓦（注 2）の存在や大型建物、大型倉庫群などがある 6 世紀後半～7 世紀代の比恵・那珂遺跡群の評価については、「那津官家」のはか、初期「評術」、さらには『日本書紀』の記述を参照しつつ大宰府政府成立以前の「筑紫大宰」、あるいは「長津宮（=磐瀬宮）」「筑紫大郡」といった国家的機関（施設）の可能性も含めて検討されるべきである。この点、「難波宮」が置かれた難波の地に、「難波大郡」や「難波屯倉」があったとされることが示唆的である。また 7 世紀中頃までの瓦の出土は畿内の寺院以外では非常に稀少でありその意味が問われ（注 3）、『日本書紀』の記述からは「那津」（「那大津」とも）に外交・軍事拠点があったのは間違いない、遺跡群の様相からそれらは比恵・那珂遺跡群に該当する蓋然性が高く（白井克也 1998、長洋一 1994、宮本一夫 2011 など）、逆にそれ以外には考え難い。このうち「磐瀬宮」については、那珂遺跡群西方の那珂川の浅瀬が「磐瀬」とされていたとされ、対岸の古代官道「水城西門ルート」上の「磐瀬駅」（駅家）近くにそれを想定する意見もある（小田和利 2014）。那珂川における「磐瀬」の存在は首肯できるが、7 世紀後半段階（注 4）の顕著な遺跡群は奈良時代の「磐瀬駅」推定地の現在の大橋から野間付近には存在せず、「磐瀬宮」の想定地は、むしろ対岸の那珂遺跡群に求めるのが適切であり、実際に正方位の方形区画と大型建物を伴い、時期が合致（須恵器 V 期前後）するその候補遺構が那珂 117 次付近に存在する（市報告第 1034 集）。これに関連して、「大宰府政府 I 期」（7 世紀後半～8 世紀初頭）のうち、その前半期には特別に顕著な官街遺構群は展開した形跡がないこと、「筑紫大宰」の中核施設として整備されたのは「I 期新段階」とされ、飛鳥淨御原令（681 年以降）段階の可能性が高いことが注意される（吉村靖徳 2003、杉原敏之 2007）。つまり、「政令 I 期古段階」（680 年代初頭以前）の「筑紫大宰」の実質的な拠点は、依然として那珂遺跡群にあった可能性が考慮される。少なくとも、那珂は 7 世紀末～8 世紀（VI～VII 期）にかけても、古代瓦や陶硯の出土（陶硯の一部については IV～V 期の遺構群に伴う可能性がある）、正方位の道路遺構の存在（122 次、福岡市埋蔵文化財年報 Vol.23）、多数の井戸の掘削（龍孝明・久住猛雄・菅波正人・山崎頼人 2013）など、評（郡）衙のような地域拠点が存在した可能性が高い。ただし 7 世紀末



Fig.3 那珂156次調査区と近隣調査地点 (1/500)

から8世紀初頭には、南方1kmにある井尻B遺跡に寺院址（井尻廃寺）も伴う官衙遺構群が形成されており、計画的な正方位街区が形成されていたとみられる（市報告第923集）。この井尻Bについては、文字瓦や刻書須恵器などもあり、短期間の評（郡）街である可能性が検討されるべきであろう。さらに井尻廃寺からやや後れる8世紀初頭～前葉には、那珂川対岸に三宅廃寺が造営される。この二つの寺院址は同一緯度線上にあり、計画的な配置がうかがえる。この周囲には、湧臘館（筑紫館）や大宰府にも瓦を供給したらしい三宅瓦窯や老司瓦窯が分布する。

さて那珂遺跡群には那珂八幡古墳を造営の端緒とし、その分布の北端となる前期古墳群（周溝墓群）が、「道路」に沿って造営されていることが明らかになっている（久住猛雄1999・2008a）、この南端は五十川遺跡北部の今宮神社古墳である。この古墳は社殿により著しく削平され、現状は径30mの円墳状となっているが、大正末期の1/3000地形図では現在よりも墳丘が遺存して地形が南側に突出しており、また戦後早い時期の航空写真には「前方部」の痕跡があり、全長50～60mの前方後円墳であった可能性が高い。現在も西側道路の屈曲はくびれ部の存在を示唆する。旧地形図の「前方部」形状からは前期古墳とも推測できる。後期古墳では、剣塚北古墳と東光寺剣塚古墳の存在が知られるが、他にも削平された古墳が遺跡群内に散在する（44・79・110・122次）。特に79次の古墳周溝は径20m以上が想定され、IV期前半の須恵器があり該期としては首長墓級である。これらは、平野周縁の丘陵斜面に造営される多数の群集墳とは一線を画し、特に有力な氏族系譜の墓地であろう。また板付遺跡の南東には大破した石室が露出する板付八幡古墳があるが、現状の残丘からも径30mが推定される。残丘地形が突出する側の社殿替に伴う調査では、円墳である場合に存在すべき周溝が検出されず、前方後円墳とする見方も成り立つ（市報告第717集）。III A期新相～III B期頃の須恵器が採集され、東光寺剣塚に後続する本地域最後の前方後円墳であろう。さらに、福岡平野東縁にある今里不動古墳（IV-1・2期の須恵器表採あり、7世紀初頭頃）、平野西側丘陵にある寺塚穴觀音古墳（7世紀前葉～中頃か）はいずれも径30mになる大首長墓であるが、那珂遺跡群を經營した勢力（在地大首長）との関係が想定されるべきであろう。

（注1）那珂八幡古墳の周溝からは（34次）、軒丸瓦を含む7世紀中頃～末と推定される瓦類が多量に出土しており（第365集）、大型建物ではなく、祠のような比較的小規模の瓦葺建物が古墳上ないし古墳の近在に存在したのではないかという説もある。ただし墳丘上では瓦が採集できないので、むしろ34次周溝の南側あたりになんらかの施設の存在を想定すべきかもしれない。

（注2）定型化した百濟系卑軒丸瓦が伴う段階以降は「初期瓦」からは外す（比嘉えりか2008）。北部九州の本格的な瓦生産は春日市ウトロ窯跡（V～VI期古相）からと考えられ、V期（660年代～670年代前半か）の幅内に画期があり（大野城跡なども含む）、この段階に百濟系卑軒丸瓦なども導入され、VI期に普及したのである。那珂遺跡群には、「初期瓦」に後続するこの段階の古代瓦も多い（那珂13次53号井戸、那珂34次那珂八幡古墳周溝など）。

（注3）飛鳥における石神遺跡において（21次調査）、齊明天皇代（655年～661年）と推定される掘立柱建物の一つに、周回溝跡から大量の瓦が出土し、瓦葺きであったと推定されている（奈良国立文化財研究所による現地説明会資料を参照）。石神遺跡は蝦夷や隼人などの辺境の民や外国からの使節を要賓する施設とされ、那珂遺跡群の瓦葺建物の性格を考える上でも示唆的である。また朝鮮半島では、百濟や新羅の都において、寺院以外にも瓦葺建物が存在する。对朝鮮半島の外交と軍事の最前線である筑紫の那津において、主要な建物に瓦葺の存在が推定されることと関連し、非常に重要である。

（注4）ここで本報告における土器の編年と曆年代記について触れておく。須恵器編年は、小田富士雄による大別（九州編年）を用いるが（小田1964・1977など）、その様式内容について、II～V期は高橋徹・小林昭彦1990を、IV～VII期は中島恒次郎1997「七世紀の食器－九州消費地－」「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5・7世紀の土器－」（以下、「中島分類（編年）」とする）を参照した。さらにIV期は中島編年を参考にして、そのI期をIV-1・2期（IV期前半）に、II期をIV-3・4期（中島編年II-1期／II-1期新相～II-2期古相）およびV期（II-2期）に細分する（久住猛雄1999a）。その曆年代は、IV期を

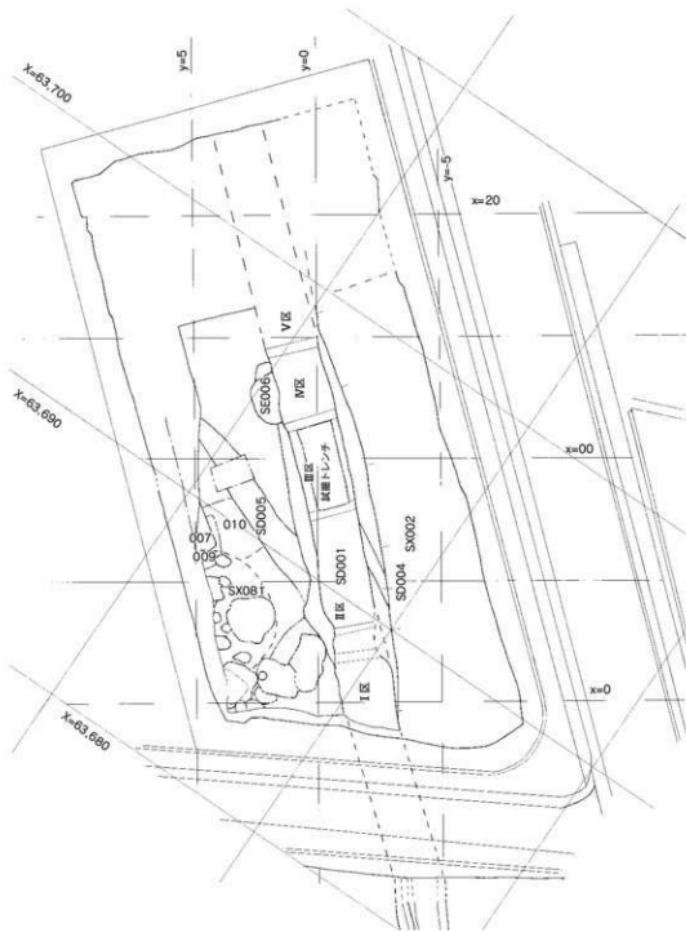


Fig. 4 那珂156次調査区敷地図（国土座標図）（S=1/100）

590年頃から660年代前半までとし（IV-3期は640年代前後）、V期を660年代中頃から670年代前半と考える（その根拠は久住1999a前掲参照）。従来の九州での編年観より新しく見るが、畿内（飛鳥・難波）の土器編年の実年代観（佐藤隆2003、長直信2012・2017など参照）との対照では整合的である。問題となる齊明天朝から天智朝（655～672年）は、おおむねIV-4期からV期に相当すると推定する。従来说のIV期からV期の曆年代をより古くする論者は（例えばV期を7世紀中頃あるいは第2四半期とする立場）、飛鳥や難波との編年対比を検討した上で再考るべきであろう。この点については、長直信が筆者の曆年代観も参照した上で熟考を重ねており（長直信2012・2017）、従来「V期」を7世紀第2四半期ないし下っても7世紀中頃としていた論者にも、最近ではV期を7世紀第3四半期とすることに同意する見方が出てきている（石木秀啓2017）。そうなれば従来の各跡、各遺構の曆年代比定とそれに基づく歴史解釈も全面的見直しが必要になる。「V期」（IV期末を含む）の曆年代の再検討

により（ほぼ齊明・天智朝となる）、従来は「7世紀後半」50年間のイメージであった「VI期」は7世紀第4四半期を前後する年代幅に、「IV期」は上限こそ6世紀末だが下限はV期との移行期を含めて7世紀「中頃」までの長い年代幅で考えざるを得ない。この曆年代幅の変更により、比恵・那珂の初期官衙や初期瓦に関わる遺構群の評価や意義も再考されるべきだろう。また、「古墳時代後期」はⅢB期までとし、V期以降は「飛鳥時代」とすべきである。（本文中引用文献は報告書末尾にまとめた。）

4. 周辺の調査

本報告の那珂156次調査周辺で実施された既往の調査成果について概観したい（Fig.2・3）。ここでは主に弥生時代から奈良時代について見ていくが、一部中世以降についても触れる。156次調査が所在するアサヒビル博多工場地内では（156次は工場敷地南東隅にある）、施設建替えなどに伴って多くの発掘調査がなされている。15次調査（市報告第267集）は工場内縁地となっている東光寺剣塚古墳の確認調査で、墳丘規模の確定と三重塼の存在が明確になった。その後の周囲調査により（78次、99次ほか）三重塼の実態がより明確になってきている。15次では、古墳墳丘下にある弥生時代から古墳時代前期の遺構も明らかになった。特に15次4・5・15cトレンチ検出の弥生終末期～古墳前期の溝状遺構は、南側は16・77・100次の、北側は128・129次の溝状遺構に繋がり、弥生終末期から造営された長大な「道路」調査の一部をなすことが明らかになっている（久住1999b・2008）。また4・5・7トレンチで検出された壺棺墓群は、南は16・100次さらに3次・80次・136次まで、北側は89次および99次西線、128・129次まで続く長大な壺棺墓群（128・129次では先行する土壙墓・木棺墓がある）の一部であり（Fig.2に想定帶を一部掲載、北側は比恵遺跡群近くまで続く可能性がある）、後の長大な「道路」自体、この壺棺墓群列を意識して形成された可能性が出てきた。実際、100次では壺棺に切られる墓域中の溝（SD003）が延長部分では古墳初頭の土器が出土したり（元々先行溝があった区画線上に、「道路」造営時に側溝を再掘削した可能性がある）、128・129次では後代の道路遺構に平行する弥生中期の墓域を画する溝があり、36次でも後代の道路推定線の東側に平行する弥生後期の溝があり、弥生中期の墓域（墓群列）を意識した、断続的な「先行道路」が存在していた可能性がある。東光寺剣塚の北西部三重塼が検出された那珂99次では、その「道路」から東に分岐するとみられる、別の「道路」遺構が検出されている。時期は弥生終末期の成立と同じである。この東側延長は段丘内の谷部に達するが、この谷部が弥生時代から存在したものか後の造成なのか、前者の場合たとえばここに船着場のようなもののが存在しないかどうか、今後の調査で注意すべきである。この谷部が後世（中世以降？）の造成であれば、その「道路」の延長部分の那珂135次において、弥生後期後半～終末期の柵列による方形区画の一部が検出されていることが注意される。壺棺墓群列（Fig.2範囲内）は、15次は橋口編年（橋口達也1979）KIIc式壺棺、16次ではKIIc～KIVa式（中期中頃～後期初頭）があり、この墓域は日常土器軸用小児壺棺が多く（須玖II式古段階=中期後葉～後期初頭）、さらに土壙墓もある。土壙墓は報告では多くが壺棺墓に先行ないし壺棺墓群の初期までとされているが、一部は後期とみられる横口式土壙墓および足元掘込土壙墓であり、後者は型式学的に後期前葉～後期中葉に下るものがある（SK-12）。1基だけ飛鳥時代末（VI期後半）の土壙墓（SK-17a）があるが、土器の副葬レベルからすると下部の墓壙は別遺構で弥生後期の足元掘込土壙墓だろう。100次は東隣の16次と同じくKIIc～KIVa式、小児壺棺もあり須玖II式新段階～後期初頭がある（16次より削平度が大きく失われた小児棺があろう）。土壙墓らしき土坑もあるが削平で少ない。うち一基は後期初頭の足元掘込土壙墓だろう（SK017）。16・100次の壺棺墓は時期幅があるが、主体はKIIIa・b式である。80次ではKIIIa～IIIc式と出土土器片の下限からおそらく後期後半の大型二段墓壙土壙墓（墓壙下部南側は「足元掘込」の退化か）がある。136・137次ではKIIc～KIIIa式とおそらく後期に下るガラス小玉出土の土壙墓があり、やはりおそらく後期の横口式土壙墓とみられる土坑がある（SK03）。さらに墓域中に飛鳥時代後期の須

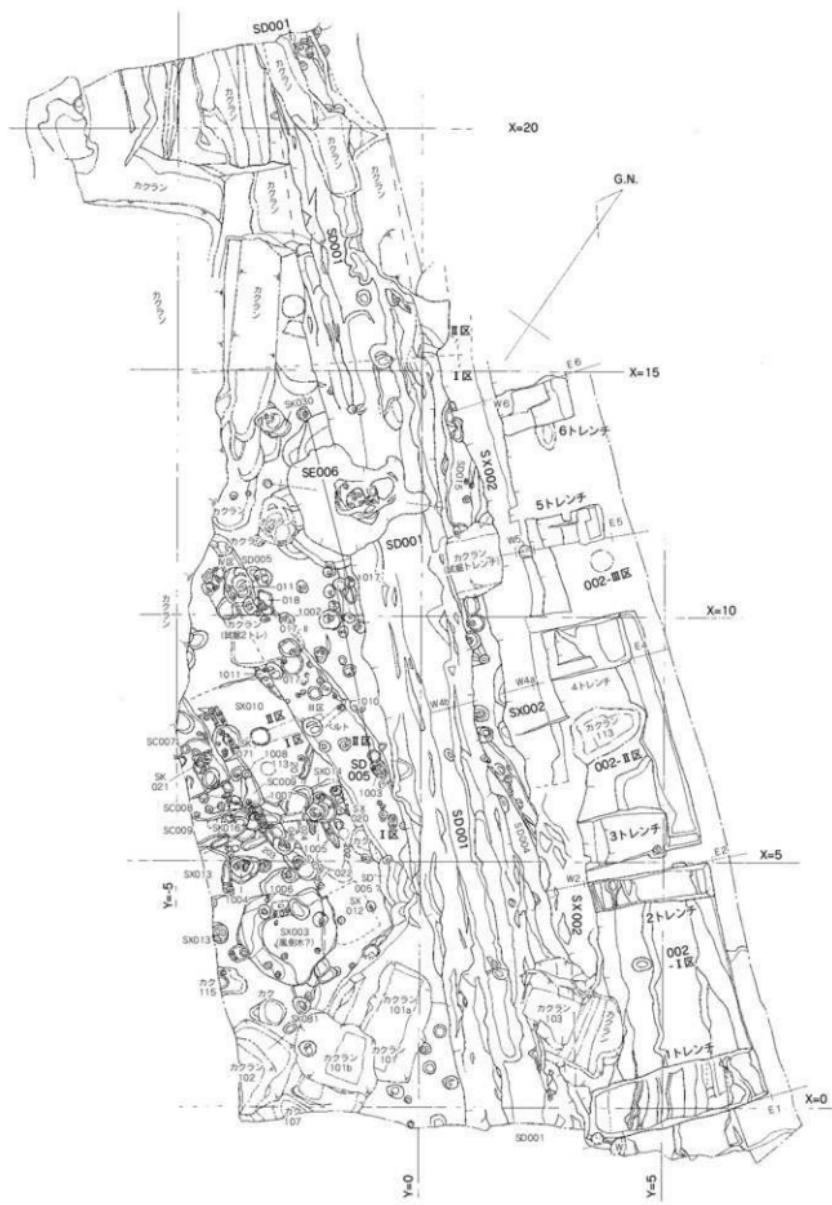
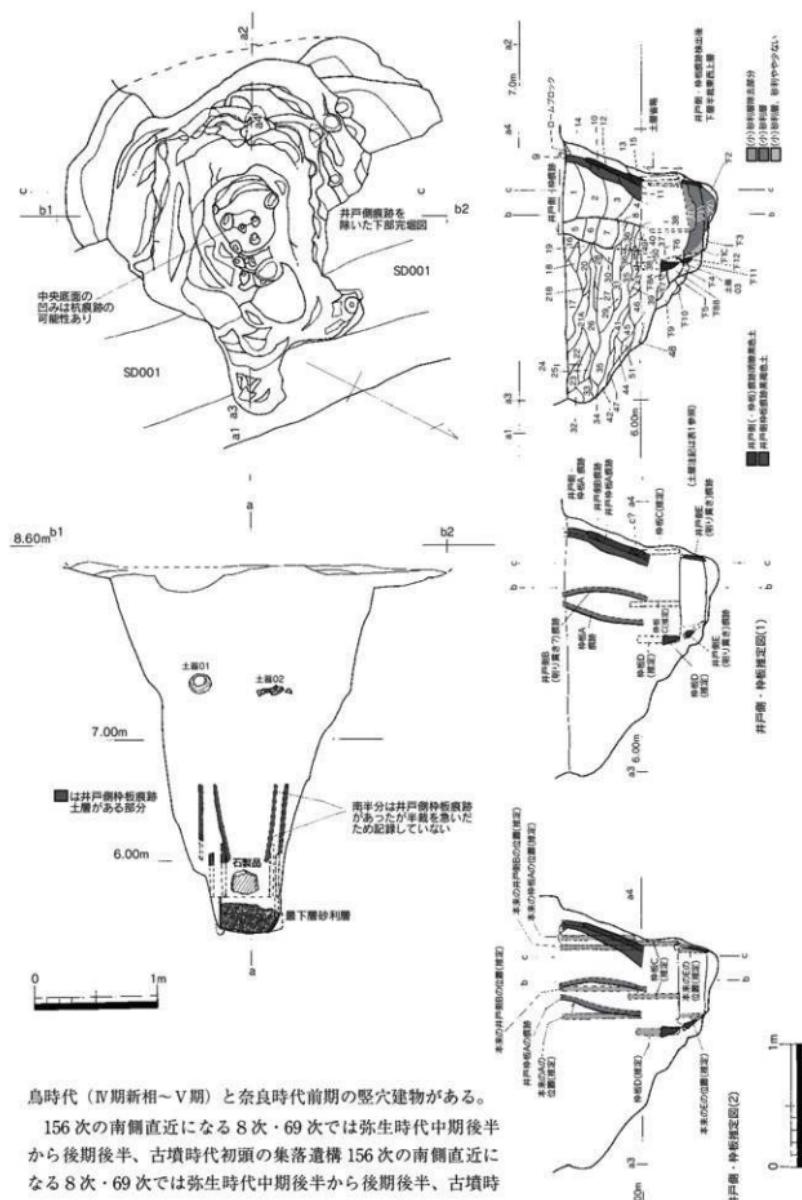


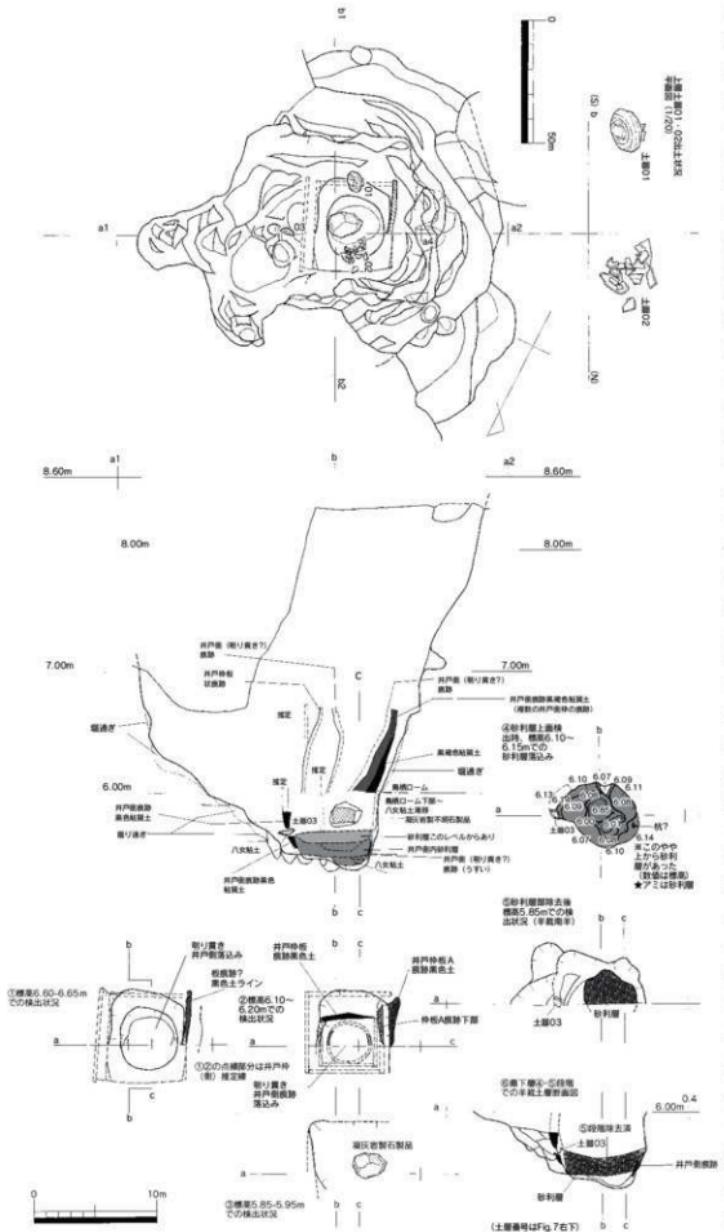
Fig. 5 那珂156次調査区内全体図 (1/100)



鳥時代（IV期新相～V期）と奈良時代前期の竪穴建物がある。

156次の南側直近になる8次・69次では弥生時代中期後半から後期後半、古墳時代初頭の集落遺構 156次の南側直近になる8次・69次では弥生時代中期後半から後期後半、古墳時代

Fig. 7 SE006掘方平面図・南北断面図・下層東西土層図 (S=1/40)



代初頭の集落遺構（竪穴建物・掘立柱建物・井戸）が検出されている（24次は削平著しく弥生中期末～後期初頭の井戸1基のみ）。69次では弥生後期中頃の竪穴建物屋内土坑から舶載内行花文鏡片が出土したが、土坑の形式から後期初頭頃の足元掘込土壙墓の可能性も考慮される。156次も削平があり当該期の明確な遺構が無かったが、ほぼ同じ時期幅の土器が出土している。8次では、青銅器铸造に関する取瓶、石製鋳型片、中子が弥生中期末～後期初頭の遺構から出土し、この付近で一時青銅器生産があったことが分かる。その後、8・69次では古墳後期末～飛鳥時代前半期（ⅢB期～Ⅳ期新相）の集落が展開し、これらを切るようには8次西側でⅣ期新相～VI期前半の溝（SD07-SD05-SD03-SD08-SD04）

Fig. 8 SE006平面図（遺物出土状況図）・東西断面図・下層各段階平面図（S=1/40）

表1. S E 0 0 6 下層・最下層土層注記 (Fig. 7)

Fig. 7右上 SE006下層井戸土層
1. 5~7SYC3 (暗赤褐色～暗褐色) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 3%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
2. 7SYC3 (1ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 30 ミリ以下 7%、粘性ややあり、しまりやや多い。
3. 7SYC3 (1ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 3%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
4. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 3%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
5. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 30 ミリ以下 7%、粘性ややあり、しまりやや多い。
6. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
7. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 2%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
8. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
9. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
10. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
11. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
12. 7SYC3 (3ミリ以上) 粘質シルト・褐色ローム 20 ミリ以下 10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
13. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
14. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
15. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
16. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
17. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
18. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
19. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
20. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
21. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。(一やや多い)
22. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
23. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
24. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
25. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
26. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
27. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
28. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
29. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
30. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
31. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
32. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
33. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
34. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
35. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
36. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
37. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
38. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
39. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
40. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
41. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
42. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
43. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
44. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
45. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
46. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
47. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
48. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
49. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
50. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
51. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
52. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
53. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
54. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
55. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
56. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
57. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
58. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
59. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
60. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
61. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
62. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
63. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
64. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
65. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
66. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
67. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
68. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
69. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
70. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
71. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
72. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
73. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
74. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
75. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
76. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
77. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
78. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
79. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
80. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
81. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
82. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
83. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
84. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
85. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
86. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
87. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
88. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
89. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
90. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
91. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
92. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
93. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
94. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
95. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
96. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
97. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
98. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
99. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
100. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
101. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
102. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
103. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
104. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
105. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
106. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
107. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
108. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
109. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
110. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
111. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
112. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
113. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
114. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
115. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
116. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
117. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
118. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
119. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
120. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。
121. 7SYC2 (3-4ミリ) 粘質シルト・褐色ローム 5-10%、粘性ややあり、しまりやや多い。

と、8次東側SD01と69次西側にまたがるIV期新相～VII期（奈良時代初頭）までの溝がある。いずれもほぼ真南北方位で平行している。8次SD01には初期瓦も出土する。この両溝は南北に延びて「道路」状となる可能性があるが、156次では擾乱や谷部造成落込み部分のためおそらく遺存せず、検出できなかった。8・69次の南側の谷部を挟んだ86次では、弥生中期後半から後期末までの竪穴建物などの集落遺構がある。弥生終末期で造営群が一時途絶えるのは、この南側にある那珂八幡古墳の築造と関係があろう。那珂八幡「古墳」は終末期新相（I B期）の築造と考えられ（久住1999・2017）、築造期に周囲の居住域が一時廃絶し、移動している状況がうかがえる。また58次では、弥生中期中頃（須玖I式新相）～後期前葉の土器が北側の「谷部」に落ち込む包含層から出土する。この状況からは「谷部」は弥生時代にもあったともいえるが、この地点での傾斜は緩やかであり、急に落ち込む箇所は後世の造成が考えられよう。156次の東側の「谷部」を挟んだ地区は、これまで調査が少なかったが、近年調査事例が多くなりその様相が判明してきた。67次では弥生前期中頃（板付IIa式）掘削の平面格円形の環壕（V字溝）があり、この環壕が機能する前期末までにかけて環濠の内外に貯蔵穴群がある。環壕が埋没した以降の弥生中期からは、土壙墓・壺棺墓群が展開する。壺棺墓はK III a式とそれに対応する須玖II式古相の小児棺からK III c式とそれに対応する内湾「く」字口縁の中型棺（報告ではK IV a式とするが中期末）までがある（「丸みをもつ壺棺」ST-21はK III c式ではなく小児棺ST-31に切られていることからも型式学的にK III a式段階である）。土壙墓は切りあから壺棺墓群に先行するものもあるが、一部は後期初頭以降の「足元掘込土壙墓」と考えられ（「壺棺が抜かれた」とするST-71およびSR-59、SR-28、SR-46）、型式学的に後期中頃までがある（SR-51）。墓地群の展開後の古墳初頭に竪穴建物がある。67次の北側、156次の東側の153・154次では、中期後半頃に掘削された大溝（条壕）がある。上面幅は4.0～4.2 m、深さ2.4 mと大規模で、深さ1.6 mまでは逆台形の箱掘、中央下部はさらに細い逆台形

をなすという特異な形状をなす。153次では大溝の北側肩部に柱穴列（柵列）があり、北側を囲む防御的な「環壕」であった可能性が高い。溝は掘削後しばらく維持されたよう、下層の出土遺物は少なく、中層に後期後半～古墳初頭の土器層ができている（II A期の土器相は在来系主体で比恵・那珂では後進的な土器相である）。完全埋没は上層の土器から飛鳥時代に下る。153・154次では弥生後期初頭の井戸を除き、大溝の機能した中期後半～古墳初頭に併行する遺構が不明確であるが、古墳後期末（III B期）～飛鳥時代前半（IV期）の堅穴建物群がある（IV期以降を「古墳後期」とする記述が多いが不適切である）。おそらくこの時期に造成され削平が進んだとみられる。154次4区SC041（IV-2期）からは、滑石製玉製作に関わる遺物が出土している。142次は弥生後期初頭の井戸と、中期後半～後期前葉および古墳初頭～前期前葉（II A期～II B期：久住2017）の遺構と遺物がある。細かい時期は不明だが、土壙墓SK25は半島系碧玉の管玉であり、弥生後期～古墳前期だろう。90次は未報告だが、弥生後期～終末期の堅穴建物や井戸とIII B期ないしIV期の堅穴建物がある。151・152次は、弥生中期後半と後期（？）、古墳後期末～飛鳥時代前期（III B期～IV期）の堅穴建物群があり、151次1区・152次1区には古墳周溝とみられる弧状溝がある。151次1区・152次1区のSD003は須恵器の一組から古墳後期中葉（III A期）で、滑石製白玉多数と土器模造鏡が廃棄されていた。祭祀とみられ、小古墳の周溝だろう。この溝を切るSD004はIII A期新相の須恵器坏身がある（『6世紀前半』との報告は誤り）。これも小古墳の周溝だろう。その他、SK054は弥生中期後半の土壙墓、SK011は貯蔵穴ではなく削平された弥生後期初頭～前葉の足元掘込土壙墓だろう。この地区の北側では66次と135次の調査がある（66次報告＝市報告第841集にある66次調査区の位置は誤りで、Fig.2が正しい）。66次は弥生終末のベッド付堅穴建物と古墳後期中葉～飛鳥時代前期（III A期～IV期前半）の溝や土坑がある。堅穴建物SC10は古墳後期と報告されるが、古墳後期～飛鳥前期の溝群との重複関係に矛盾があり（SD18はSC10を切り、SD35などは堅穴肩部を「破壊」しているとするが、調査区壁面写真を見るとこの延長がSC10を切っていた可能性が高い）、須恵器は重複する溝に帰属し、実際の時期は弥生終末期だろう。135次は、上面で古墳中期後半～末（TK23）の柱穴群や古墳後期中葉～末（III A期～III B期）の堅穴建物群などがあり、これらの間や下部から弥生後期～古墳前期前半の遺構が検出された。このうちSB018は18m以上の柱列があり、柱穴規模が小さいので、建物ではなく柵列による方形区画だろう。後期後半～終末期の集落の重要な施設が調査区周間に広がる可能性がある。遺構密度も高く、この周間は今後の調査において注意を要する地区である。

II. 調査の記録

1. 調査の概要と基本土層

那珂156次調査地点は、那珂遺跡群中央北部に位置し（Fig.1）、調査地の道路を挟んだ南側では8次、24次、69次の調査がなされており、弥生時代から古墳時代前期、飛鳥時代から奈良時代、中世の各

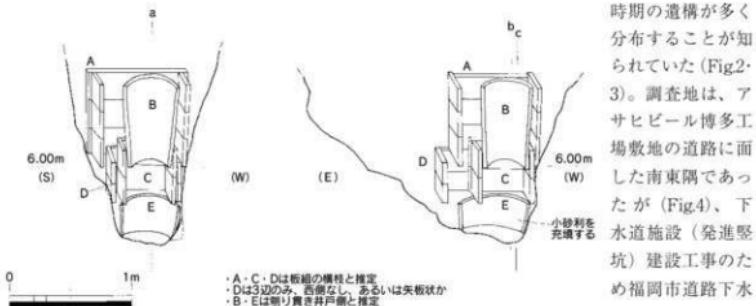


Fig. 9 SE006井戸構造想定復元模式図（S=1/40）

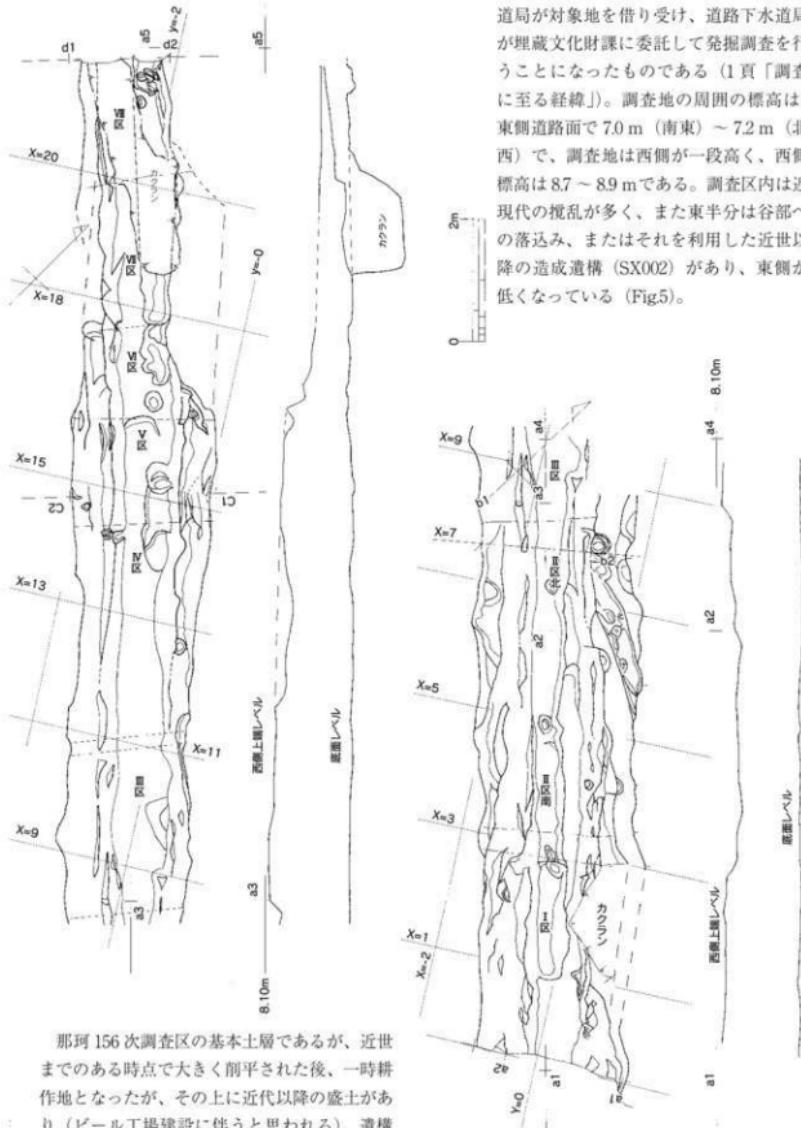


Fig.10 SD001平面図・縦断面図 (S=1/100)

那珂156次調査区の基本土層であるが、近世までのある時点で大きく削平された後、一時耕作地となつたが、その上に近代以降の盛土があり（ビール工場建設に伴うと思われる）、遺構

地山（A・B・Cすべて黒板的に移行）

- A. 5YR4L6~5-6 粗粒シト化ローム土。しまりあり。飼料あり。
シルト50%
B. 5YR4L6~6-6.5 粘ローム粘質土。しまりあり \wedge やや強度。
粘性あり。(やや強)
B25YR5-6粗粒シト化ローム土。しまりあり(やややややり)
C. 5YR5-6~6-6少一部)粗粒弱ローム土+25YR5-6プロ
ク尾根土。しまりあり。粘質やや強度となる。黒色(暗褐色)。
パラス性。のどがり。すこし下へ入る。

調査に先立つて、道路下水道局が工事を委託した工事業者により

調査に先立つて、道路下水道局が工事を委託した工事業者により工場敷地のフェンスの撤去および移動と樹木除去が行われ、引き続き

工場敷地内へのエンペル撤去および移動と同不除去が行われ、引き続き

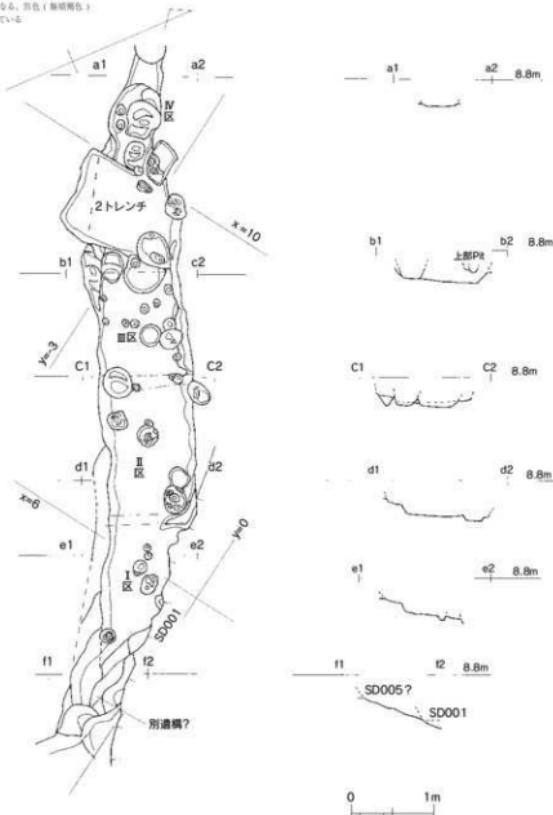


Fig.12 SD005実測図 (S=1/60)

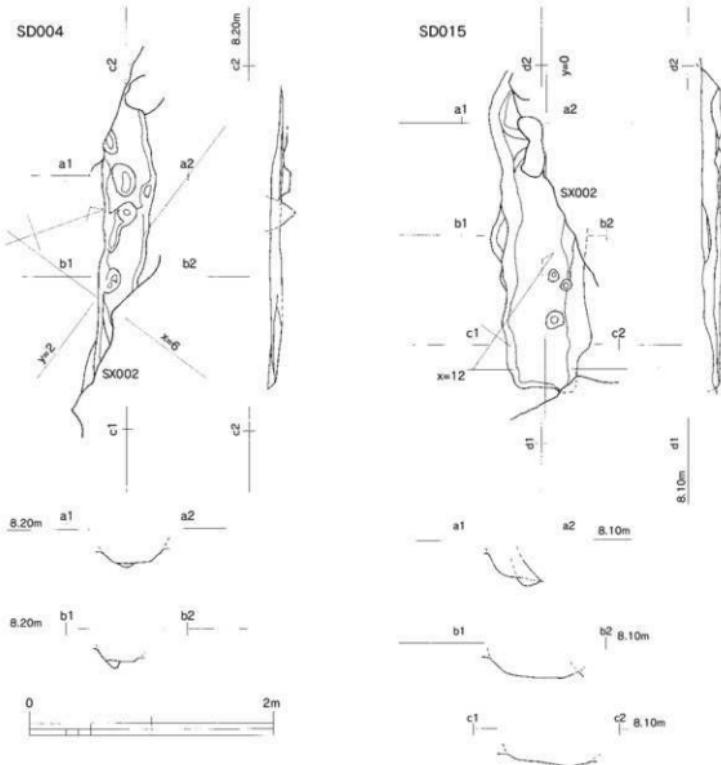


Fig.13 SD004・SD015実測図 (S=1/40)

4月16日から22日にかけて、埋蔵文化財調査課の立会のもと、埋蔵文化財調査面までの表土掘取り工事と廃土の場外搬出が行われた。5月1日より埋蔵文化財調査課による発掘調査を開始した。当初、掘削不十分箇所の掘削や掘削法面の整備などについて、発掘調査の重機掘削に熟練した業者の重機を稼動した。以後の調査中廃土は調査範囲内処理のため、先に南側を主体に調査し(I区)、調査範囲の北部は後に再度掘削して調査を行った(II区)。各区の調査期間は、I区が平成27年5月1日～7月5日、7月6日に重機による反転掘削を行い、II区が7月6日～7月31日であるが、I区のうち東側落込み(造成遺構)部分は調査が終了していないので、反転時に埋め戻さず7月末日まで調査を行った。7月15日には大方の作業が終了し、現場機材の大部分を撤収したが、一部の図面作成作業が残り、かつ工事業者が8月1日から現場入りのため、それまで現場管理を行う必要があり、7月末日まで調査を継続した。

2. 検出遺構

(1) 井戸 (SE006 : Fig. 7, 8、P.L. 3-1, 4, 5, 6-1, 9-5.10、表・裏表紙写真)

SE006は調査区のほぼ中央で検出した。井戸は本来SD001に切られるが(Fig.4)、上面での検出径から深くなる可能性と掘削土量が多くなることを懸念し、SD001の重複部分を早々に掘削して井戸の掘削を行ったので、全体図(Fig.5)や全体写真(P.L. 1-1, 2-1)では一見SE006が溝を切っているように見える。北東半分をSD001に切られるため上部での径は推測になるが、南～西側で遺存した部分から推測すると、径3.2m前後の不整円形となる。遺存した南西部上部は浅い豊穴状テラスがあるが内側は急角度で落ち込む。北東側上部は遺存しないが、北方向と北東方向にステップ状施設があり、これを考慮すると北東方向の上端はやや突出した、上面が不整形だった可能性がある。この突出部が推定される北東方向と、井戸枠の方位がほぼ一致し、主軸はN-56.5°-Eとなる。中央底面は標高5.35m前後で、検出上面からの深さ3.08m前後だが、同時期の豊穴建物の削平度を考慮すると+50cm以上の深さが推測される。上層～中層では南西側に平瓶2個体の廃棄が見られたが(Fig.8上、P.L. 3-2, 4-1, 9-5)、他は意図的な廃棄(祭祀行為など)が推測される遺物の出土はなかった。

SD001底面レベル(以下を下層とする)までの観察では(SD001南西側壁面での観察)、井戸側の落込み痕跡などは見られなかつたが、SD001底面レベルから少し下げた段階で、井戸側ないし井戸枠の落込みとみられる痕跡を検出した(標高6.65-6.70m前後、P.L. 4-2)。ここで調査方針を迷つたが、長軸方向で半裁して土層を観察することにした。結果的には、北半分の平面的構造の情報を捨てることになったので、厳密に言えば時間さえあれば「四分割」で裁断して土層を観察するのが最善だったかもしれない。いずれにしても、半裁して土層を観察しつつ上面も再度精査検出した結果、当初井戸枠・枠落込みと考えた範囲よりも西側に狭まつた範囲で、方形枠板状のものが外側にあり、その中にさらに円形ないし方形の落込みがある、ということが推定された。南西隅は、方形枠板の片方が外側(西側)に突出していただろうことも観察でき(同時にこの状況から横板の可能性が高いと判断した)、土層断面観察では、外側の推定方形枠板は、おそらく枠板の腐朽による周囲の土圧で上部が西側に傾いていることも推定された。さらにこれを上から掘り進める途中で、少し下げた段階で内側の落込みは方形状から円形状に変化したので(Fig.8下部①)、おそらく方形枠板の内側の落込みは略円形の木製刳り抜き井戸枠だろうと判断し、それに沿って掘削した(P.L. 5-3・4)。ところが、標高6.15m前後の精査では、円形筒状と推定していた刳り抜き井戸側痕跡の下部が狭まっており、かつその外側に別の方形枠板状の痕跡が観察された(Fig.8下部②、P.L. 5-4・5)。ここから、半裁南側に残された覆土を枠板痕跡内側と外側の掘方充填土を分けて標高6.00m前後まで掘削した。この時点で、かなり深くなり下部が狭くなり作業にくくなつたこと、湧水し始め、底面まであまりないだろうと判断したので、以下を半裁せずに、井戸枠・側の落込みと思われる箇所を優先的に掘削した。これも結果的にはやや失敗で、以下も半裁ていれば井戸構造について推測の少ないより正確で復元ができると思われる。標高6.0m以下5.6m前後までの土層情報がないことになってしまった。実際、その標高6.0m前後の上下で、井戸枠・側構造が変わっていたらしいことが後で判明した。掘り進めると、井戸側下部中央に約30×20cm大の凝灰岩製石製品残欠が出土した(Fig.18下部③、P.L. 5-6.7)。井戸廃絶時に大きな石を投棄するというのは民俗事例や他の発掘調査事例にもあるが(久世康博2001)、祭祀行為であろう。この石を除去し下部を掘り下げるとき礫混じりの覆土となつた。土よりも小礫(砂利)がむしろ多かった。しかし当初それをあまり注意せずにそのまま掘り進めたので、小礫(砂利)層上面は正確には不明である。井戸下部の濾過装置などとしての「砂利層」として認識し、一度清掃した面で検出レベル(実際の上面は若干上部である)の記録を残したが(Fig.8下部④)、個々の小礫については実測する余裕もなく、写真のみの記録で済ませている(裏表紙写真、P.L. 6-3-5)。こ

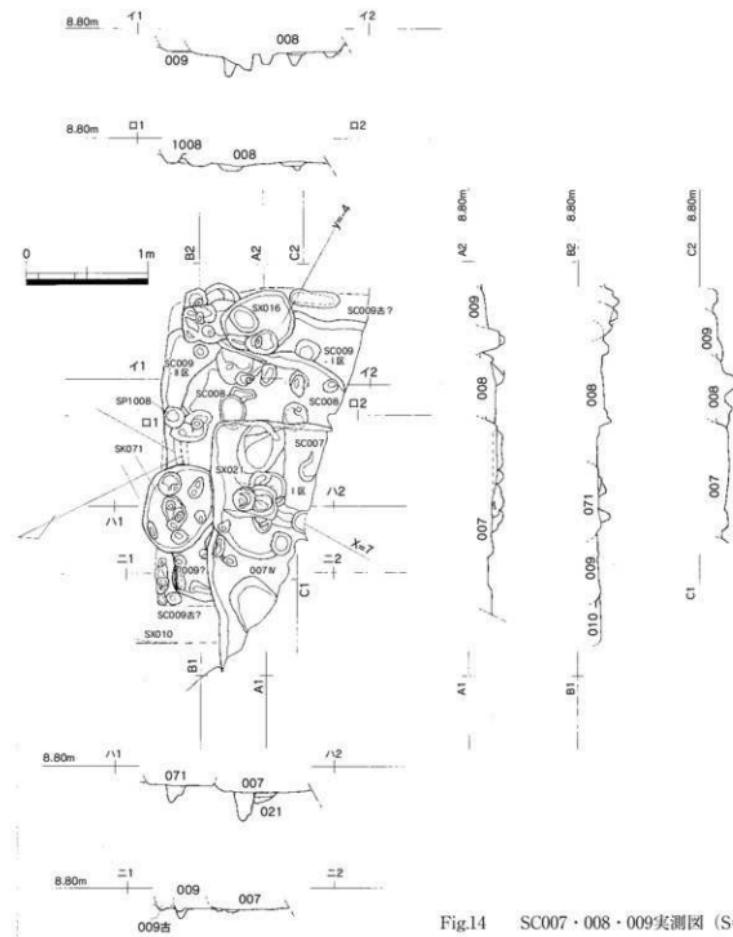


Fig.14 SC007・008・009実測図 (S=1/40)

の段階で再度半裁し、土層を精査観察した（Fig.7 右上下部土層、Fig. 8 下部⑤⑥、P.L. 5 - 5.10 - 2）すると、東側に板痕跡があり（Fig.7 右上「下 6 層」）、またその下部に須恵器坏身（P.L. 10 - 1、Fig.8「土器 3」）を挟んで「下 12 層」の木質痕跡があり、これは砂利層を除去すると井戸掘方最下部に円形に廻ることが確認された。したがって、井戸最下層には下層上部の削り貫き井戸側とは別の（径が大きい）推定削り貫き井戸側（曲物の可能性もあるが木質痕跡のみなので不明）があり、その上部に推定板組みの井戸枠があったと考えられる。また途中で土層を観察していない部分があるので推測が入るが、掘方下部南西側壁の状況と砂利層の落込み状況から、この間にもう一つ方形の枠板組があったと推測する。この井戸構造の推定過程が Fig.7 の右側であり、最終的な推定図が Fig.9 である。複雑な構造となるが、少なくとも、上部に方形枠板組（A）と円形削り貫き井戸側（B）があったこと、下

部に上とは別の径の大きな円形井戸側（推定割り貫き：E）とその上部に別の方形枠板組（D）があったことは認められよう。また方形枠に隅柱痕跡はなかった。問題は、枠板Dの内部にさらにCの別の方形枠板組みを推定したことである。これについては掘方の状況と砂利層や石製品投棄の落込み状況からの推測で、また南西側上部は、下層上半半截土層の有機質痕跡層がこの部分厚くなるので（11層下部）、板組が重複していたのではないかということである。この推定復元案の問題点は、Dの枠板組は三辻しかなく、周囲の補強でしかな

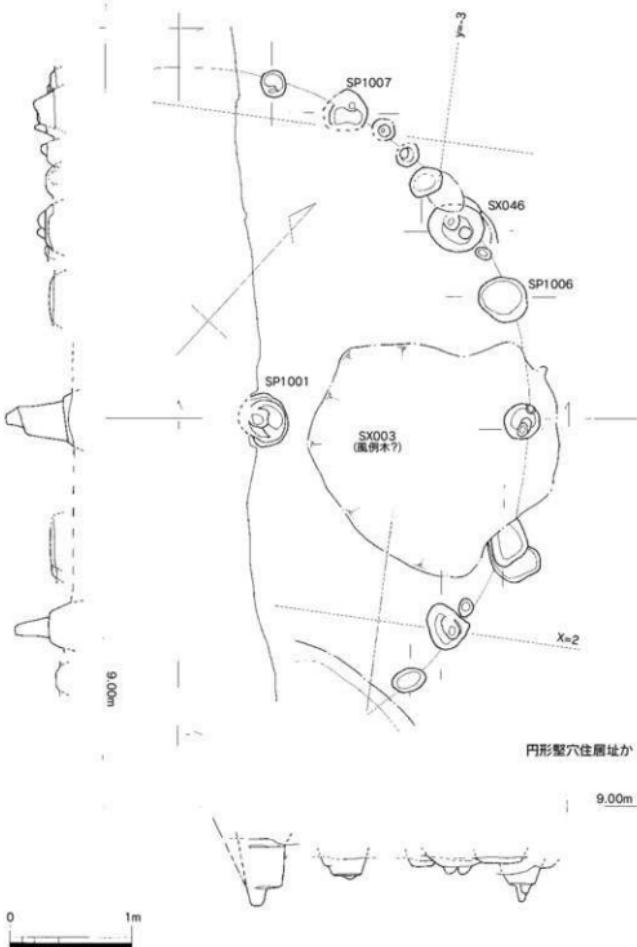


Fig.15 SX (SC?) 081実測図 (S=1/40)

いということである。あるいは枠板組Cは存在せず、Cの西辺とした部分が枠板Dの西辺の可能性もある。また方形枠板が「横板」というのは、Aの精査過程から問題ないと思われるが、個々の板の高さと枚数（段数）については全く根拠がなく、板自体が残っていないので横板どうしの結合方法については全く分からぬ。上部と下部に井戸構造が分かれるので、一度井戸の廃棄祭祀（石製品投棄）をした後に、再度その上で井戸を作り直した、という可能性も考えられなくもないが、湧水層の八女粘土層は井戸側E（内部砂利充填）下部の壁面以下であり、それより上部は鳥栖ロームと八女粘土の漸移的層で、湧水は雨天時などにはあるが、安定的な湧水は望めず、井戸枠・側の再構

築の可能性は薄い。いずれしても、方形枠板と矧り貫き井戸側の組合せで、かつそれが二段構造で、さらに最下部に砂利層という濾過装置を備えるような入念な井戸構造は少なくともこの時期（6世紀末～7世紀前半）の北部九州では類例はなく、比較例としては畿内中枢（飛鳥・難波）や、朝鮮半島の国々の井戸との比較検討が必要となる。これについては若干の考察を報告書末尾に載せたい。

出土遺物には飛鳥時代前半(IV期)の須恵器・土師器のほか、初期瓦片・弥生土器片(Fig.18.19-1~3)、最下層の凝灰岩製石製品残欠(Fig.22)がある。これらの詳細は後述するが、須恵器だけを見ると、井戸側痕跡が検出されたレベルより下部の一群(Fig.18-9~17)も、上部の一群(Fig.18-1~8)も、須恵器坏の径(坏身の場合は蓋の口縁部が当たるところで計測する)に一部重複があり(12.5cm前後)、それほどの時期差はない。ただし下層にはやや大きな径(12.8~13.7cm)のものが3点あり(Fig.18-9.10.13)、井戸構築時期~井戸廃絶初期はIV期初頭~古相(IV-1~2期)であろう。埋没過程の中層以上はIV-3期で(Fig.18-8は牛頭小田浦40-1号窯跡段階か)、上層の平瓶などもIV-3~4期前後だろう(IV期の細分は久住1999a)。石製品残欠は、本来は東光寺劍塚古墳に伴うものと考えられる。初期瓦片(Fig.18-18)は、桶巻作りによる平瓦であり、IV期初頭では「神ノ前タイプ」の須恵器成形作りが本地域では通有なので稀有な例となる(通有の瓦成形瓦は、確定例は牛頭ではIV-2~3期の懸利西2号住居以降で、那珂115次建物群での瓦導入も同様)。今後、牛頭窯跡群でも通有な瓦成形の瓦の焼成窯の初現が認める可能性を示す重要な破片である。南側8次の南北条溝に初期瓦が多く出土しているが(10頁以下「4.周辺の調査」)、近隣(調査区西側の高台か)に瓦葺建物などがかなり早くからあったのかもしれない。

(2) 溝狀遺構

・SD001 (Fig.10、土層断面 Fig.6・11、P.L. 2, 3, 7-2~7, 11-1, 2)

調査区中央で略南北（南東-北西）にかけて検出した溝。調査区を縦貫し、検出延長は23.2 mで (Fig.4)、南北にさらに延びる。南側24次・69次の溝と同一であるのは確実である (Fig.2・3)。調査区北半のⅡ区では残りが悪く溝幅がやや狭くなり、浅くなっているが、北側も終わっていない。ほ

表3. (Fig.16 上段) SX002-1
トレンチ土層注記続き



Fig.10 SA002灌浆施工剖面图(1) (S-1/40)

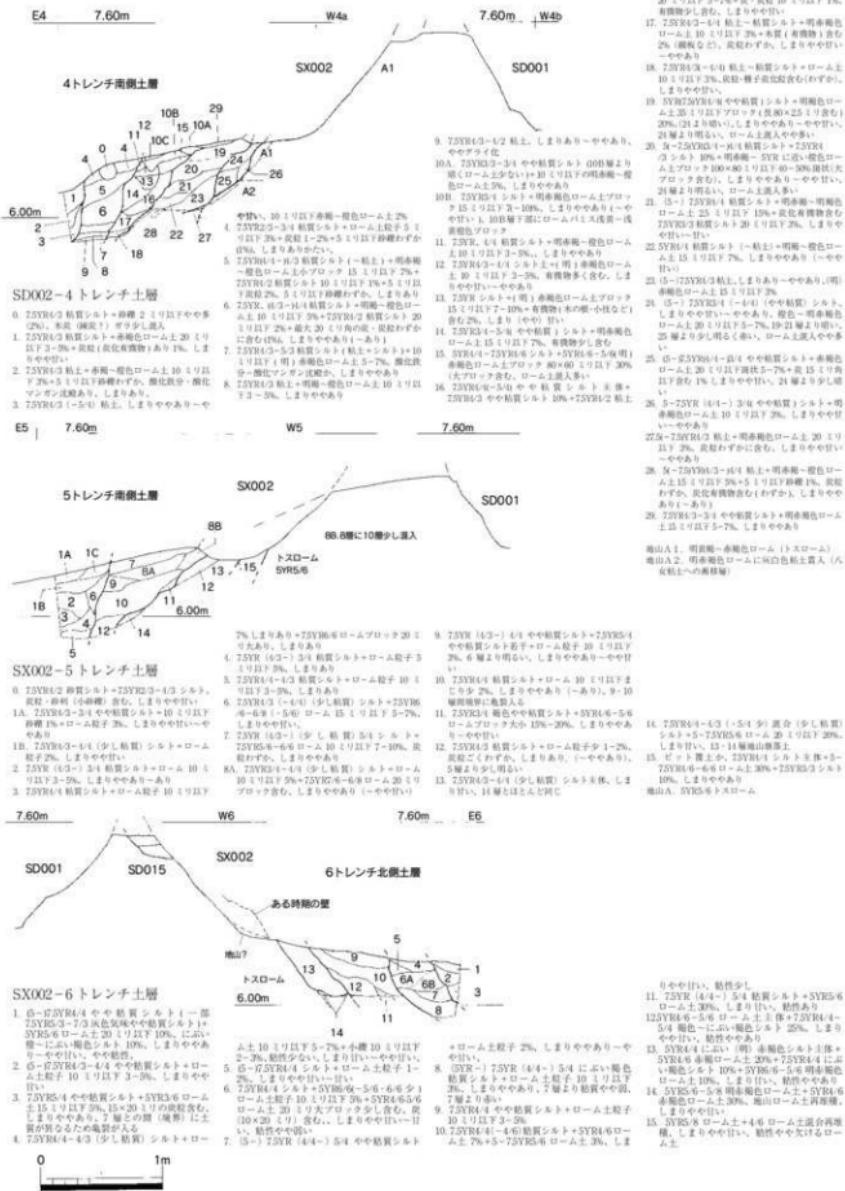


Fig.17 SX002落込み土層断面図(2) (S=1/40)

(Fig.11 上段) では幅 182 m、深さ 120cm (標高 6.70 m)、V 区南側 (Fig.11 下段) では幅 2.3 m、深さ 122cm (標高 6.78 m)、Ⅶ 区北端 (Fig.6 下段) では西側の配管搅乱が無かった場合を想定して幅 1.0 ~ 1.2 m となり、深さは 44cm 前後 (標高 6.74 m) である。溝底面は、一部前後するが、おおむね北側の方が高くなる。溝断面は逆台形ないし U 字形をなす。土層断面を観察すると (Fig.6・11)、不整合面がいくつか認められ、複数回の掘り返しが推定される。多くの部分では、掘り返し層は当初の底面までは達していないが、一部は最下層の埋没直後に元の底面以上に掘り返したことが観察される箇所もある (Fig.11 下段、P.L. 7 - 5)。出土遺物 (Fig.18 - 4 ~ 19 - 15) から、中世末期 (戦国時代後半、16 世紀) に掘削され、近世に埋没したのだろう。おそらく地形を利用した、中心が西側の高台上にある城館縁辺部を囲郭した壕 (堀) の一部だろうと推測される。

・ SD005 (Fig.12, P.L. 8 - 1・2.11 - 3)

I 区西側で検出。全長 8.3 m 以上だが、東端を SD001 に、西端を搅乱に切られる。全体的に遺存度が悪いが、西側ほど削平が進んでいる。東端の断面「f1 - f2」(Fig.12) 部分は SD001 が西側に膨らむ箇所か、または別遺構の可能性があるものの、一緒に掘削してしまっている。このためこの部分は全長に入れていない。残りが若干良好な東側中央で幅 1.2 から 1.3 m、深さ 20 ~ 25cm (ピット状の凹みは除く) で、西端は幅 0.4 m、深さ 5 センチ程度の遺存である。底面レベルは西端が 8.48 m、中央から東側は 8.35 ~ 8.30 m である。土層を詳しく観察していないが、一度埋没した後に再掘削されたような土層ラインがあった。断面形は上部が削平されるが、ほぼ逆台形状であろう。方位は、N - 70° - W である。出土遺物は少なく、図化できたのは 1 点のみである (Fig.20 - 16)。Ⅲ B 期～Ⅳ 期前半の須恵器壊身であるが、SC007 ~ 009 とも方位がそろい、SE006 の井戸枠主軸方位とはおよそだが直交するので、これらはほぼ同一時期に共存した遺構群の可能性が高い。覆土も SC007 ~ 009 と同様の極暗褐色 (~ 暗褐色) を主とするものであったこともその推定を支持する。

・ SD004 (Fig.13 左)

I 区中央南側、SD001 と SX002 の間で検出した溝。全長 4.6 m 以上だが、南北を新しい遺構に切られる。遺存度が悪く、幅 34 ~ 52cm、深さ 12 ~ 14cm (ピット状の凹みは除く) である。底面レベルは 7.9m 前後であり、本来は SD005 よりも深い。方位は N - 70° - W であり、SD005 と平行する。同時存在の可能性もあるが、SD004 は遺物がほとんどなく証明できない。ただし覆土の特徴は似て入る。北西に延長すると SE006 に当たってしまうので、SE006 とは時期が別であるか、井戸の手前南側で溝が終わるかである。

・ SD015 (Fig.13 右)

I 区北縁中央、SD001 と SX002 の間で検出した溝。全長 2.65 m 以上だが、南側は搅乱に一部切られるが立ち上がっており、北側と東側は SX002 に切られるが、北端は東側に屈曲するような様相である。幅は 60 ~ 70cm、深さは 12 ~ 26cm (ピット状の凹みは除く) である。溝底面は標高 7.60 ~ 7.67 m である。

上部が顯著に削平されるが、断面形は逆台形であろう。方位は N - 35° - W で、SD001 の方位とも飛鳥時代遺構群の方位とも合わない。覆土は暗褐色というよりは褐色土である。出土遺物はあまりなく、図化できたのは 2 点のみである (Fig.20 - 17・18)。12 ~ 13 世紀、中世前半の遺構であろう。

(3) 壓穴建物 (壓穴住居)

・ SC007 (Fig.14, P.L. 8 - 2.11 - 4・5.12 - 1)

I 区中央西縁で検出。西側から北側は搅乱か調査区外。SC008・009・010 を切り、SX071 (9 世紀の内黒土師器焼出) に切られる。略南北 2.2 m 以上 × 略東西 12 m 以上、検出面からの深さは 4 ~ 10cm 程度で相当削平されている。貼床はあったが薄く、掘方底面まで下げて記録した。ただし SX021 など床面の凹み (小土坑)・ピットの一部や南辺の壁溝は貼床面で検出した。SX021 の深いピット部分は、四

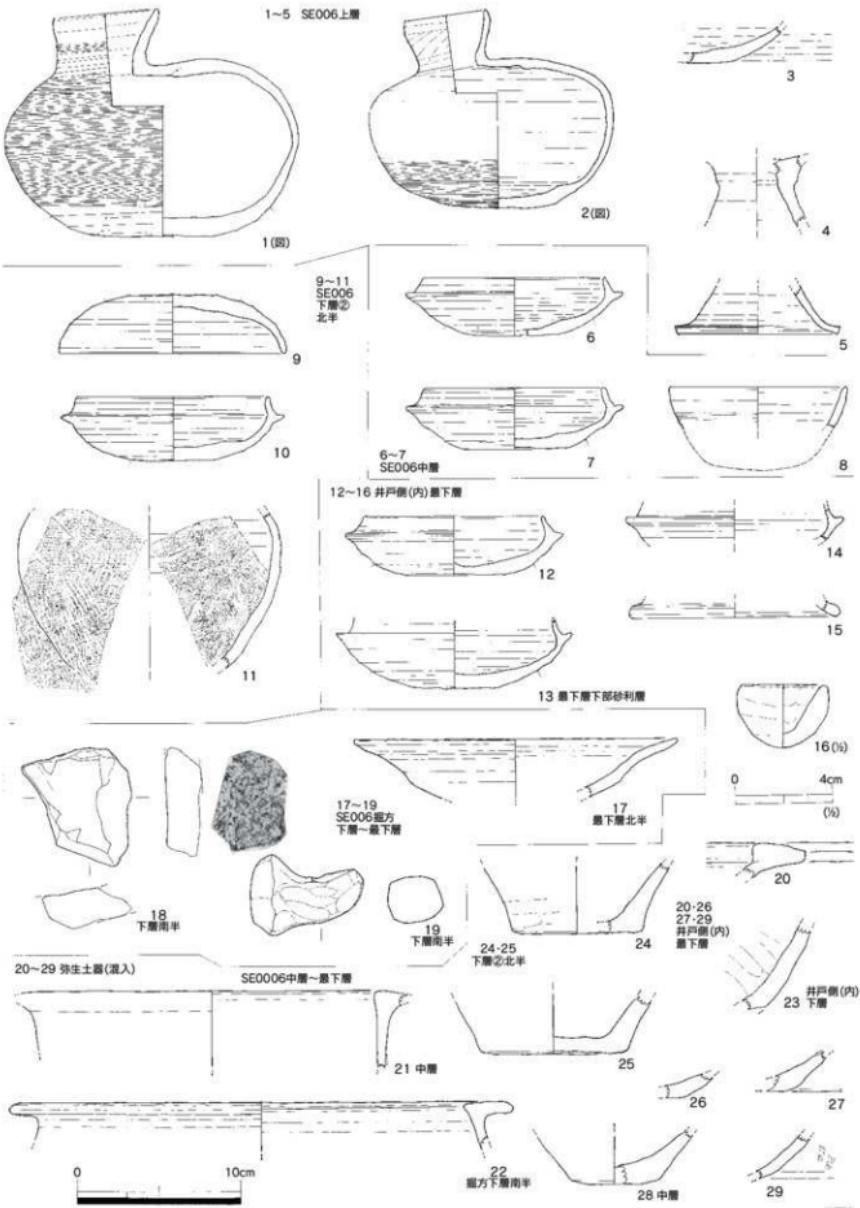


Fig.18 SE006出土遺物実測図1 (S=1/3, 一部1/2)

本主柱の一つだろう。このピットと南辺の距離を測り、北側の対応ピットの位置を推定すると、最短でも南北辺は26m以上になる。床面は北側がわずかに高くなる。堅穴北辺は検出外のためカマドの有無は不明。方位はN-60°-Wで、出土遺物には須恵器壺片や混入した弥生土器片がある^g (Fig20-19・22)、細かい時期決定は難しい。おそらくⅢB期～Ⅳ期前半（8頁注4）であろう。

・SC008 (Fig14、P.L. 8-2.11-4・5.12-1)

SC007とSX016に切られる。南北22m×東西12以上。深さ6～8cmの遺存。SC009より新しい。東辺と南辺、北辺に壁溝・壁際ピット（小穴）が断続的にある。南辺が弯曲し西側で北に屈曲しそうに見えるが、これは掘方凹みの形態で、実際の壁は壁溝方向に直線的に延びると思われる。ただし南北2.2mというのは間違いなく、那珂遺跡群ではⅢB期～V期前に最小一辺2m前後の堅穴建物が存在し（同様の小規模堅穴にカマドが付設する那珂125次例がある）、特に問題は無い。主柱穴は不明だが、主柱穴が無いタイプだろう。北辺が切られカマドの有無は不明。方位はN-44°-W前後。出土遺物は少なく、図化遺物もわずかだが^g (Fig20-20・21)、須恵器高环片からⅢB期～Ⅳ期前半だろう。

・SC009 (Fig14、P.L. 8-2.11-4・5.12-1)

SC007・008、SX016に切られる堅穴建物。南側の壁が平行して二つあり、建替と判断した。内側の新しい方をSC009新、外側の古い方をSC009古とする。前者は南北24m×東西1.6m、後者は南北2.6m。深さは5cm以内の遺存しかない。東辺とSC009古の南辺に断続的な壁溝ないし壁際ピットがある。掘方にはわずかな貼床があった。主柱穴が不明で、SC008同様に主柱が無いタイプの堅穴建物であろう。北辺が切られカマドの有無は不明。方位はN-56°-WでSC007に近い。出土遺物が少なく時期の詳細は不明だが^g、SC008に先行するも近い時期と考えられ、SC010を切るためⅢB期かそれ以降。SC007・008・009の覆土は全て極暗褐色～暗褐色土で類似していた。SC009古南辺の南側30～40cmにも平行する小溝があり、壁溝痕跡とみられ、SC009古よりさらに先行する堅穴建物痕跡と考える。

・SC010 (Fig5、P.L. 8-2.12-1)

SD005とSC009の間で検出した方形堅穴建物の貼床範囲。少し下げたらすぐに地山上面となってしまった。北辺は壁の立ち上がりが判明し、南辺は貼床範囲が分かないので、南北26m×東西2.0m以上となる。方位は、北辺からN-35°-E（南北軸だとN-55°-W）となり、SC009とはほぼ同じである。小型堅穴建物が多い古墳後期後半以降だろう。北辺があるのでカマド痕跡が期待されたが、検出時はすでに貼床面下部であり削平された可能性が高い。壁溝も不明だが、これも浅い場合は痕跡を残さない。出土遺物に須恵器があり (Fig20-23)、壺蓋とすればⅢB期前後である（図は天地逆か）。

・SX081 (Fig15、P.L. 12-2.13-1・2)

1区西側の堅穴建物群やピット群などを調査し、その全てのベルト（重複関係を残すベルト）を除去した後に明確になった円形状のピット列。樹木痕の可能性があるピットを除いて図上で復元した。復元半径29mの円弧をなすが、堅穴の壁はもう少し外側であるから（壁自体は完全に削平される）、半径3.2～3.4mとなり、径6.4～6.8mの円形堅穴建物（堅穴住居）となるだろう。SP1001は、位置的に想定される中央土坑の両脇二柱穴の一つである可能性がある。出土遺物は不明確だが、周囲の調査例から弥生時代中期後半～中期末の堅穴建物であろう。調査区内に須玖II式～後期初頭の弥生土器片が多くあり、それらが伴う遺構があったはずなので、このSX081はその候補の一つになる。

・SX201 (Fig5、P.L. 8-2.12-1)

SC010貼床跡を切るような小溝だが、SC010の貼床が薄くすぐ地山になったので、その関係は微妙。北側はSD005に切られ、南北長75cmの遺存。南端が西側に屈曲して終わるが、削平された堅穴建物隅角の壁溝だろう。方位はN-32°-W。時期は不明確だが、古墳時代後期以前の可能性もある。

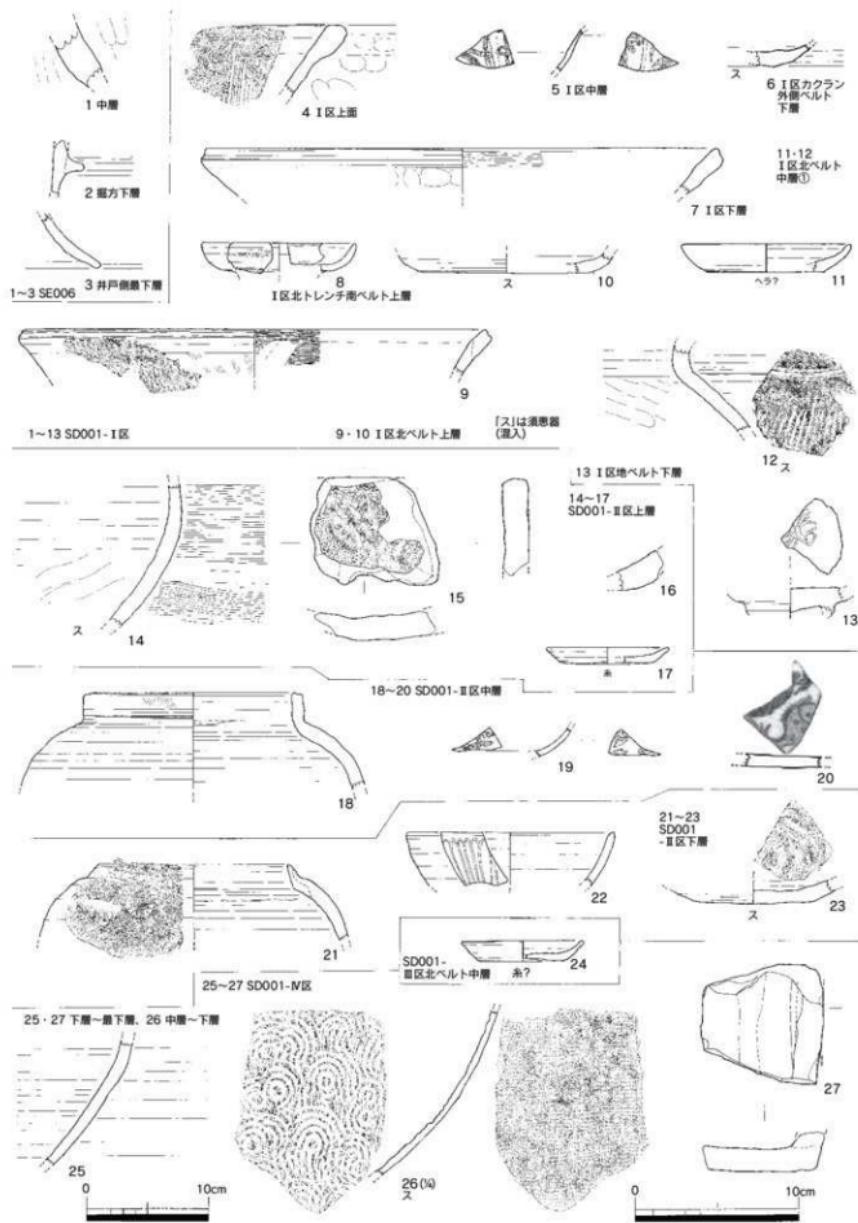


Fig.19 SE006(2), SD001(1)出土遺物実測図 (S=1/3, 一部1/4)

・SX202 (Fig5、P L. 12 - 1)

SC009 の南東側にある柱穴と浅い溝状遺構が連なる遺構。堅穴建物の壁溝ないし掘方の壁際掘り込みだろう。全長 1.75 m 前後の遺存で、方位は N - 61° - W。北端のピット列は西側に屈曲するようにも見え、完掘後状況は西側が床面状の浅い凹みとなり (P L. 12 - 2)、堅穴建物の痕跡だろう。方位は SC009 に近いが、SX081 を構成する柱穴に切られ、弥生時代中期の方形堅穴建物の可能性がある。

・SX203・SX012 (Fig5、P L. 12 - 1)

SX203 は SX202 と SD005 の間にある小溝で、70cm 長しか遺存しない。北側は SX014 に切られ、南側は削平で消える。この溝の西側は検出時に貼床状であったので、堅穴建物の壁溝痕跡とみられる。方位は上記 SX202 とはほぼ同じ。SX012 は西側を風倒木痕 SX003 に切られる貼床痕跡の範囲。検出時に確認したが、表面精査を何度もしているうちに消失した。確認できたのは 1.1×10 m。SX203 の延長と貼床確認範囲の東辺が合致し、同一遺構の可能性がある。須恵器小片があり (Fig20 - 24)、IV期前後。

(4) 谷状落込み（造成）遺構 (SX002 : Fig5、Fig.16・17、P L. 1.13 - 3 ~ 6)

SX002 は調査区東側の落込み遺構。周囲地形に残る（現状は道路がその上を走る）谷状地形の西側肩部である。谷状地形自体は、SD001 の位置と走行方向から少なくとも中世には存在した可能性が高いが（那珂 58 次例から弥生時代中期の時点でも何らかの地形上の鞍部があったと思われる）、今回の調査により近世以降に段丘間の鞍部ないし小谷部をさらに広げて造成した可能性が高いことが判明した。まず落ち込み検出後は、近現代以降に埋め立てた上部層のみ重機で掘削した。重機で掘削が不足した近代層下部は人力で掘削したが、以下はトレンチを落込み方向（落込み上端と直交方向）に 6 箇所入れて土層断面を観察した。調査の早い段階で掘削した 1・2 トレンチの状況から底面はかなり深くなることが分かり（2 トレンチは底面に達していない）、全掘すれば相当の土量となり時間的予算的に厳しいこと、また調査区東側の調査時現況の道路際擁壁の保全から深く掘削するのは危険なこと（表土や落込み覆土上部はしまりが悪く、深く掘削すると崩落の恐れがあった）、この 2 点から全体は下部を掘削せず、上記トレンチ 6 箇所のみの調査とした。各トレンチも、調査期間と梅雨時であったことも影響し湧水が激しかったことから、1 トレンチのみ地山まで掘削した他は途中で掘削を断念した。以下簡単に記すが、1 トレンチで顯著に分かるが (P L. 8 - 2)、まず大きく外側まで掘削され (Fig.16 上段 65・66 層)、一部埋没した後に、細い逆台形状の溝が何度も掘られたことが分かる（1 トレンチ溝イニ）。おおむね、西側（外側）の溝が古く、東側に向かって新しくなる。東側現状が道路であるので、あるいは先行する切り通し道路があり、その側溝の可能性も考慮される。ただしその場合、東側に想定される谷部地形の底面が深いと予想されるのと矛盾が生じる。そのため水路など別の機能も考えられる。他のトレンチでも土層の不整合が観察され、いずれも埋没しては溝を掘り返すという状況が想定されるが、1 トレンチで検出した細い逆台形溝が全て延びるのか（ただし 1 トレンチ溝イニは落ち込み全体の一部を掘削した可能性も排除できない）、谷状地形落込みの幅を狭めながらも全体的に掘削し直したものなのか、判断は難しい。こうした溝ないし落込みの再掘削の繰り返しは、近代に入ってて行われなくなったとみられる。1 トレンチ溝イニ上部の段差（凹み）は、SX002 の調査面の調査区東縁に沿って北に延びていて、近代前期の堆積層である。出土遺物には (Fig20 - 27・28.29 - 1 ~ 15)、上層（重機掘削後の検出面）や上記凹みに近代前期の遺物があり、トレンチ内には近世遺物がある。その他、弥生時代から中世までの遺物が多く混入する。正確な時期は不明だが、近世のある時点（少なくとも 18 世紀）には以前から存在した段丘間の谷部（鞍部）を拡張するような造成工事があり（谷部中央には水路が掘削された可能性もある）、造成した谷部がある程度埋没するごとに再び大きく掘削し、落込み際に側溝状の条溝

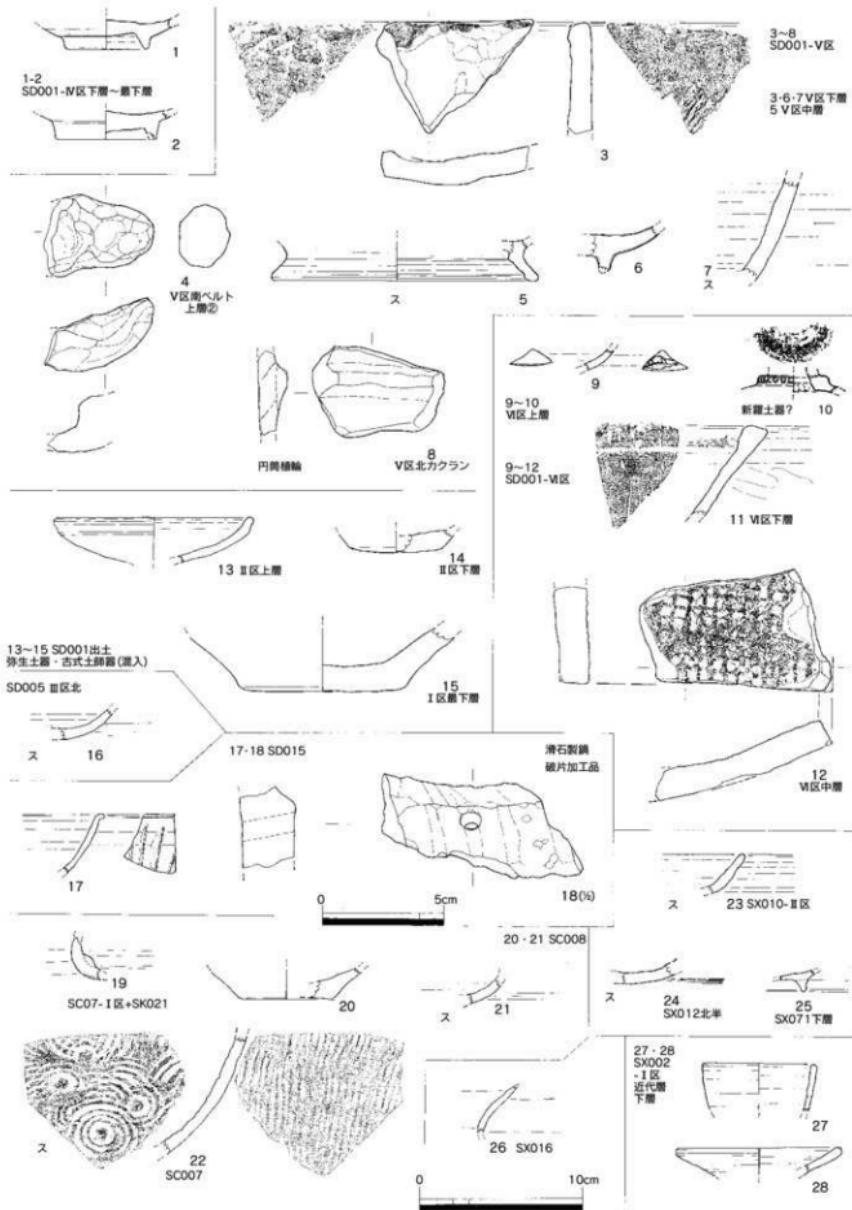


Fig.20 SD001(2), その他SD, SC, SX出土遺物実測図(2) (S=1/3, 一部1/2)

が何度も掘削され、最終的に近代以降は現在に続く切通状の道路となつたと考えられる。

3. 出土遺物 (Fig.18 ~ 22, P.L. 14)

以下、出土遺物について記述するが、紙幅も少ないので簡潔に記す。また報告すべき情報の一部（個々の遺物の出土遺構・層位など）は挿図中に記し、ここまで各遺構の報告で記述したものもある。

(Fig.18) 1 ~ 15 は須恵器。1・2 は平瓶。3 は坏身ないし坏蓋。正確な径は不明だが坏蓋にして径 14 ~ 15cm になると予測され、Ⅲ A 期前後か。4・5 は高杯。8 は古相の坏 G の坏身。6・7・10・12・13 はⅣ 期初頭～中頃までの坏 H の坏身。9 はⅣ 期前半の坏 H の坏蓋。以上、坏身に出土が偏る。11 は壺。外面平行タタキ後カキメ、内面は当具痕をナデ消し。15 は高杯の脚裾部か。16 は土師器の手すくね小塊。祭祀行為に関わるものか。17 は土師器の高杯。宗像周辺に多い形式だが福岡平野にもある。Ⅳ 期併行で問題ない。18 は土師質の初期瓦平瓦片。外面やや粗い格子目タタキ。Ⅳ 期前半での出土は稀で、類例の検討が必要。19 は土師器の把手。鍋・壺か瓶かは不明。20 ~ 29 は弥生土器。20・21・25 は須玖 I 式の壺と壺、22・24 は須玖 II 式の壺と壺、23・28 は後期後半の壺、26・27 は後期前半～中頃の壺と壺、29 は終末期の壺。中期前半（須玖 I 式）から終末期までがある。

(Fig.19) 1 ~ 3 は弥生土器。1 は支脚または器台。後期～終末期か。2 は壺の胴部突帯として図示したが、天地逆で瓢壺の肩部の可能性もある。3 は高杯脚部だが、図化していないが破片中位上に穿孔痕跡があり、赤色顔料（ベンガラ？）が付着する。2・3 は中期末～後期初頭。4 以下は SD001 出土。4 は土師質土器摺鉢。中世末～近世初期。5・8・19 は肥前陶磁の染付磁器の碗皿類。6 は須恵器坏 H の身。7・9 は土師質土器の捏鉢。10 は須恵器の坏 H の坏身。径は不確定だが比較的大きくなり、坏蓋にして径 15cm 前後か。Ⅲ A 期。11・17・24 は土師器小皿。いずれも外底回転糸切り。12 は須恵器の壺だが、外面は、木目直交平行タタキ、内面は当具痕を丁寧にナデ消し、頸部屈曲などからあるいは陶質土器の可能性もある。13 は龍泉窯系青磁碗。14 は須恵器の壺。15 は平瓦。16 は分厚い器壁の軟質焼成土器だが内面が被熱で褐色に変色して表層が溶融気味で、坩堝なしで取瓶だろう。南の那珂 8 次で取瓶があり、弥生中期末前後か。青銅器生産関連遺物。18 は口縁部が短く直立する須恵器無頸壺。V ~ VI 期のもの。20 は肥前陶磁染付大皿。21 は土師質土器の湯釜。中世末～近世前期。22 は龍泉窯系青磁の碗。15 ~ 16 世紀（明代）のもの。23 は須恵器の坏 H の身で、内底に当具痕が残る。24 は褐釉陶器の壺。中世前期の輸入陶磁。25 は須恵器の壺。外面格子目タタキ、内面同心円文当具痕。薄い器壁でやや古いものか。27 は土師質の方形火舍。近世前期。

(Fig.20) 1 は肥前陶磁の染付磁器碗。内底蛇の目釉はぎ。18 世紀頃。2 は中世前期の輸入陶磁の白磁碗。3 は須恵質（硬質）焼成の平瓦。内面有目痕、外面ナメ平行タタキ後ヘラナデ。古代瓦。4 は土師器の把手。5 は須恵器の脚台付壺の脚台。VI 期前後。6 は龍泉窯系青磁碗。中世後半期の型式。7 は須恵器の壺か。8 は円筒埴輪片。Fig.21 ~ 7 も同様で、本来は東光寺剣塚のものだろう。9 は肥前陶磁の染付磁器碗。10 は新羅土器の細頸壺の頸部と考えられ、頸部突帯の側面と上面に半裁竹管文が連続して施文される。おそらく 7 世紀前半の型式（洪潤植 1999）。11 は瓦質土器の摺鉢。近世初期。12 は内面に格子目タタキ当具痕がある特異な平瓦。外面はヘラナデ。中世か。13・26 は古式土師器。13 は庄内式系小型器台。26 は筑前型庄内壺 I 式（久住 2017）の口縁部。14・15・19・20 は弥生土器。14 は後期後半から終末期前半の壺、15 は後期前半の壺。19 は外面丹塗で、袋状口縁壺ないし細頸壺。須玖 II 式。20 は須玖 II 式の壺。16・21 ~ 24 は須恵器。16 は坏 H の身。21 は高杯坏部。22 は壺の胴部下半片。外面は木目直交平行タタキ後にカキメ。23 は天地逆とみられ坏 H の蓋だろう。24 は細かいカキメがあり、壺か瓶類の底部。17 は中世前期の輸入陶磁の白磁碗。18 は滑石製鍋破片再の加

工品で穿孔あり。25は内黒の土師器台付塊。9世紀前後。27・28は肥前系陶器の小碗と皿。18世紀頃。

(Fig.21) 1・2・4・6・11は肥前陶磁ないし肥前系陶器など。1は陶器の行平鍋。鉄鉢の上に白濁釉。内面は橙色釉が下地にある。19世紀か。2は外面灰オリーブ色釉の陶器甕。4は褐色鐵釉の陶器甕。

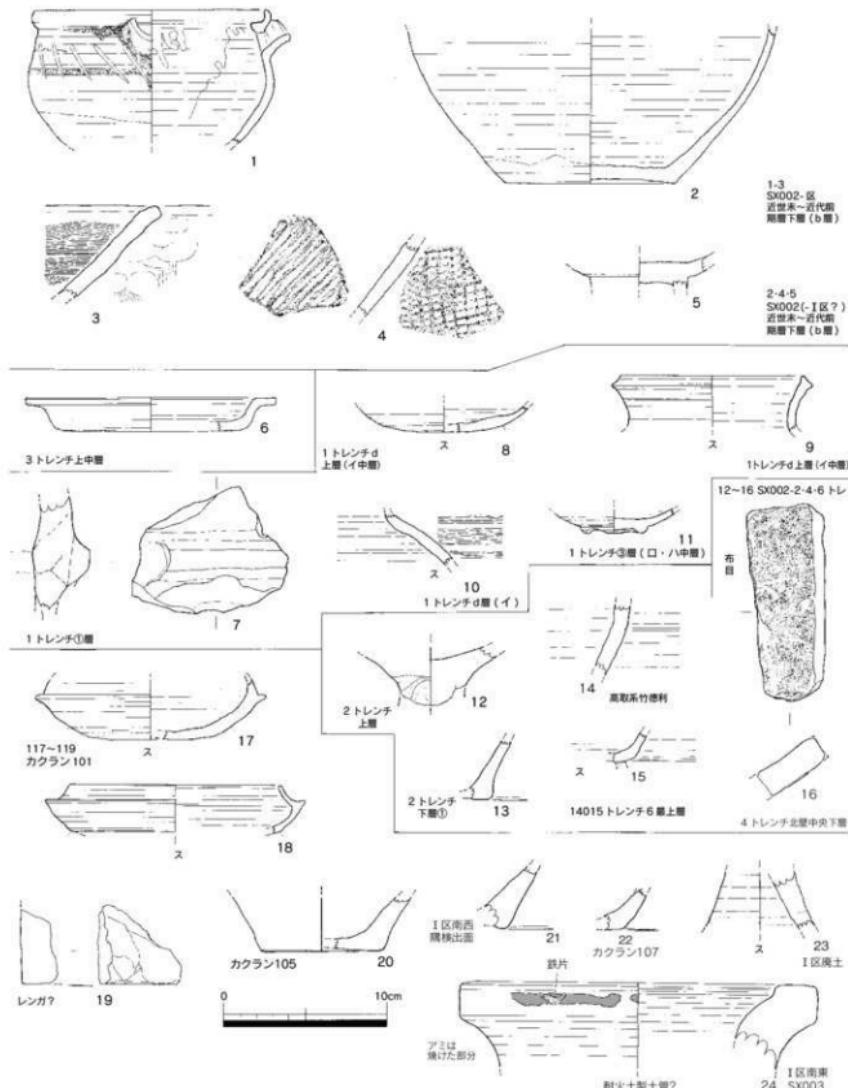


Fig.21 SX002およびカクランその他出土遺物実測図 (S=1/3)

6は褐色鉄釉の皿ないし蓋。2・3は近世後期以降。11は抉り高台の白磁塊。18世紀。14は高取系竹徳利とするが、中世前期の褐釉陶器壺(輸入陶磁)の可能性もあり。5は龍泉窯系青磁碗。中世後期。8・9・10・15・17・18・23は須恵器。8・17・18は壺口の身。17はⅢB期。18は径が大きくⅢA期か。受部から立ち上がりの断面形状が特異で、八女系須恵器。9・10は壺類。15は高台付壺身。VI～VII期。23は高杯脚部。V期以降。12・13・20～22は弥生土器。12は後期の高杯か。13・20・21は中期の甕。22は後期初頭～前葉の甕。15は土師質で初期瓦の平瓦。内面布目痕、外面摩滅し不明。19は近代の煉瓦片。24は耐火土を用いた近代陶器で土管か。口縁部外面に被熱痕と鉄片付着。(Fig.22) よくしまった阿蘇凝灰岩製石製品の残欠。凝灰岩でよいが通常よりも硬質で比重が重い。多くの面が破損・剥離で生きていないが、加工面が辛うじて生きている部分が何面がある。元の形状は不明だが、柳沢一男氏によると、古墳時代後期の石製表飾(石製樹物)とすれば、考えられるのは石製鶴の頭部の直方体部の一部の可能性があるという。元来は東光寺剣塚の墳丘上の中のものだろう。

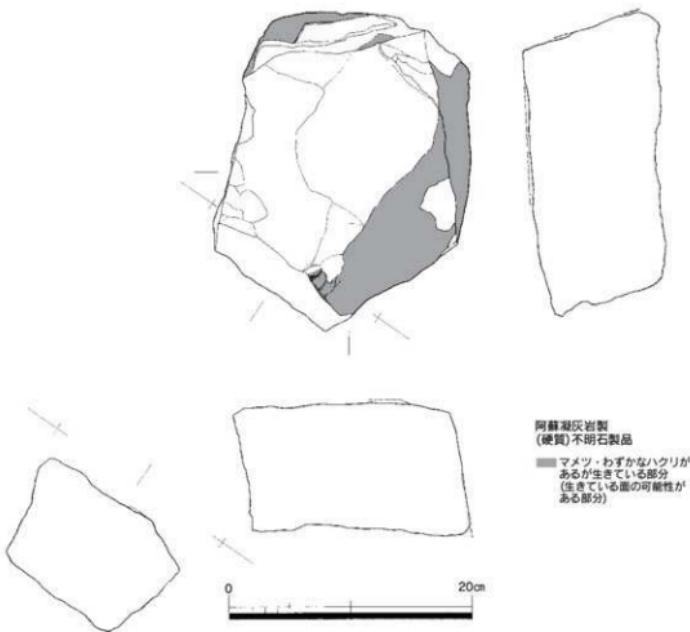


Fig.22 SE006 最下層出土石材(石製品?) 実測図 (S=1/4)

III. 自然科学分析

・那珂遺跡群156次発掘調査にかかる自然科学分析業務委託報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1.はじめに

今回の分析調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の井戸(SE06)埋積物の花粉分析を行い、周辺植生に関する情報を得ることを目的とした。

2. 試料

試料は、古墳時代後期～飛鳥時代の井戸(SE06)埋土のうち、円形井戸側内の3層(サンプル2)・4層(サンプル1)、方形井戸枠板内の11層(サンプル4)、対象試料として井戸枠外の充填堆積物46層(サンプル3)より採取された4点である。

各試料の層相は、4層が褐～暗褐色粘土(ブロック状)、3層が褐色泥ブロックが混じる暗褐色粘土、46層は褐色泥ブロックが多く混じる灰褐色シルト質粘土(ブロック状)、11層が暗褐色泥ブロックが混じる褐色シルト質粘土(ブロック状)である。

4. 分析方法

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による箇別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952,1957)、Faegri and Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、高倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は計数結果の一覧表として表示する。

5. 結果

結果を表2に示す。花粉化石・シダ類胞子はPh.1に示すように保存状態が悪く、表面に風化の痕跡がみられる。また、種類数、個数共に少ない。分析残渣も非常に少なく、全量～1/2量についてプレパラートを作成し、検鏡を行う。分析残渣の多くは、溶け残った鉱物や褐色の植物片が多く、黒色の炭片は少ない。

4層では、イネ科が7個体、アカザ科が4個体、シダ類胞子が58個体認められる。

3層では、イネ科が1個体、アカザ科が3個体、シダ類胞子が31個体認められる。

11層では、シダ類胞子が5個体認められる。

46層では、マツ属が1個体、シダ類胞子が23個体認められる。

表4.花粉分析結果

種類	地点・層位			
	SE06 4層	3層	46層	11層
木本花粉	-	-	1	-
マツ属	-	-	-	-
草本花粉				
イネ科	7	1	-	-
アカザ科	4	3	-	-
シダ類胞子				
他のシダ類胞子	58	31	23	5
合計				
木本花粉	0	0	1	0
草本花粉	11	4	0	0
シダ類胞子	58	31	23	5
合計	69	35	24	5

6. 考察

今回調査を行った井戸(SE06)埋土は、花粉化石の保存状態が悪く、ほとんど検出されなかった。一方、シダ類胞子はやや多く認められたが、それらも表面に風化の痕跡が認められた。花粉化石は好気的環境に弱く、早い段階で分解することが知られている(中村、1967など)。また、シダ類胞子は花粉化石に比べ、スボロボレニンの量が多く(Stanley&Linskens,1974)、風化に対する耐性がある(徳永・山内,1971など)。これらのことと踏まえると、今回の井戸埋土試料の花粉・胞子化石の産状は堆積時・後の風化作用の影響を示唆している。試料の層相をみると、井戸壁や井戸周囲から崩落あるいは流入した井戸の基盤をなす堆積物ブロックが含まれている。このような層相を踏まえると、調査層準の井戸埋土は堆積速度が速く、花粉・胞子が取り込まれにくい環境にあった可能性がある。この点については井戸埋土の形成過程を踏まえた評価が必要である。

本遺跡群では、那珂遺跡14次調査区で花粉分析が実施されている(野井,1992)。その結果によると、14次調査区では、弥生時代前期以前に周辺が照葉樹で開まれた沼澤地から、しだいに排水の良い比較的乾燥した土地に変化していき、干上がった後、人間が住み着いたと推定されている。また、隣接する比恵遺跡24・25次調査区の花粉分析(野井,1991)によると、弥生時代前期にはシイ属・アカガシ亜属などの照葉樹林要素と、落葉広葉樹のエノキ・ムクノキ属、針葉樹のマツ属を交える植生が存在し、弥生時代中期になるとシイ属・アカガシ亜属が優勢になり、特にアカガシ亜属がシイ属よりも優勢になることが確認されている。また、低地では弥生時代前期後半にやや縮小するものの、稻作が行われていたことが推定されている。このように本遺跡周辺では、弥生時代前期～中期に森林植生が成立可能な領域において、常緑広葉樹林が優勢であったことがうかがえる。また、低地では稻作が行われていたと考えられている。ただし、古墳時代以降については分析事例が少なく、当該期の植生については不明である。先述したように花粉・胞子などは風化作用により分解消失するため、建物などが存在する人間活動領域では花粉化石が残存していない可能性が高い。そのため、今回のような井戸などの遺構を対象に今後も分析調査を実施するとともに、調査区が位置する氾濫低地の地形発達過程、土壤生成作用の状況、さらに土壤生成層準の植物珪酸体分析を実施し、考古学的調査成果と合わせた、植生の再生・更新に関する検討を行っていくことが大切と考える。

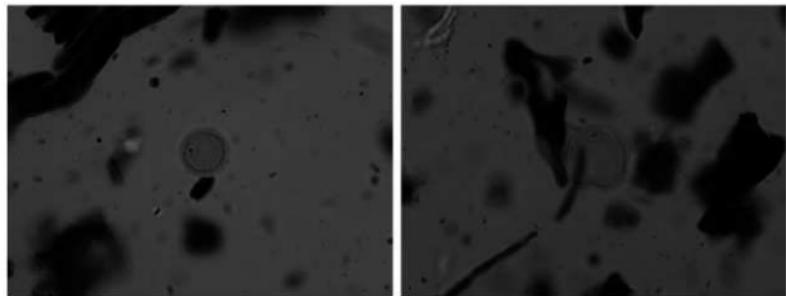
なお、北九州地域の花粉分析結果の総括(Hatanaka,1985)に基づくと、古墳時代～飛鳥時代頃の花粉化石群集は草本類の割合が高い。特にイネ科の割合が高く、イネ属型花粉も多く検出されている。また、イネ属の植物珪酸体や炭化米、穀なども検出されていることから、氾濫低地などを中心に稻作が広い範囲で行われるようになったと推定される。イネ科花粉の多産は、耕作地を開発するために周辺が切り開かれ、草地化が進んだことが原因の一つであるとみられる。このほかソバやムギ類、マメ類、アワなど雜穀類の種実も北九州各地の遺跡で検出されており、これらの栽培・利用も行われていたと考えられる。一方木本類では、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が多産する。マツは生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。マツ属花粉の増加は、周辺が切り開かれた結果、マツ二次林の分布が拡大したことに由来すると考えられる。その他、アカガシ亜属やシイ属は、ヤマモモ属、ツバキ属などとともに暖温帶性常緑広葉樹の主要構成要素であり、開発が進んでいない場所においては、自然度の高い森林が形成されていたとみられる。なお、九州地方の植物珪酸体分析では、イスノキ属やクスノキ科といった、常緑広葉樹由来の樹木珪酸体がみられる杉山(1999)。これらは常緑広葉樹の主要な樹種であるが、クスノキ科は花粉外膜が弱いため花粉化石としては検出されず、イスノキは虫媒花のため花粉化石が検出されることはある。これらもシイ・カシ類と同様に、自然度の高い場所に生育していたとみら

れる。このように、花粉化石では検出されない、もしくはそれににくい樹種の中には植物珪酸体で検出される種類もあるため、複合的に考えることは重要である。

<引用文献>

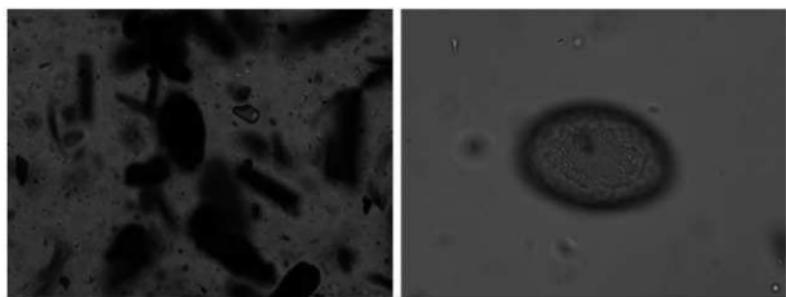
- Erdtman G,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I),Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),147p.
- Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島植物花粉図鑑.アカアコーラル企画,155p.
- Hatanaka Ken'ichi,1985,Palynological studies on the vegetational succession the Wurm Glacial Age in Kyusyu and adjacent areas.Journal of the faculty of Literature.Kitakyusyu UniveraSity(Series B),18,29-71.
- 畠中健一・野井英明・岩内明子,1998,九州地方の植生史図説 日本列島植生史,安田喜憲・三好 教夫編,朝倉書店,151-161.
- 黒田登美雄・畠中健一,1979,花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷.花粉,13,3-8.中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980,日本產花粉の標識 I II (国版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 野井英明,1991,比恵遺跡第24次、25次調査によって得られた試料の花粉分析.福岡市埋蔵文化財報告書第255集 比恵遺跡群(10),福岡市教育委員会,229-233.
- 野井英明,1992,那珂遺跡群14次調査によって得られた試料の花粉分析.福岡市埋蔵文化財報告書第291集 那珂5,福岡市教育委員会,265-266.
- 鳥倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- Stanley Robert&Linskens Hans,1974, Pollen: biology, biochemistry, management, Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York,307p.
- 杉山真二,1999,植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史.第四紀研究,38,109-124.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子・化石の研究法.共立出版株式会社,50-73.

Ph. 1 花粉化石



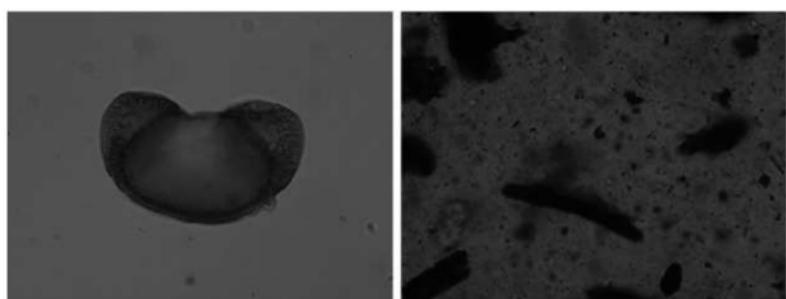
1) アカザ科(SE06 4層)

2) イネ科(SE06 4層)



3) 状況写真(SE06 3層)

4) シダ類胞子(SE06 46層)



5) マツ属(SE06 46層)

6) 状況写真(SE06 11層)

50 μ m

IV. 調査のまとめ

1. 遺構の変遷と那珂 156 次調査の意義

那珂 156 次調査では、時代順に以下の遺構群を検出した。①弥生時代中期後半～後期初頭、②古墳時代後期後葉～飛鳥時代前半期（須恵器Ⅲ B期～IV期）、③中世前半期、④中世末期～近世初期、⑤近世以降、である。①の遺構には SX081（円形堅穴建物）のほか、SX202 が方形堅穴建物として存在した可能性がある。また SD001 出土だが埠塙ないし取瓶の残欠があり（Fig.19 - 16）、南側の 8 次調査にみられた青銅器生産が本調査区にも及んでいた可能性もある。②以前の弥生時代中期前葉～中頃（須玖 I式）の土器片や、②以後の後期前葉から古墳時代前期前葉までの土器片が少なからずある。遺構は削平されて不明確になったものの、集落はや弥生後期前葉から古墳前期前葉まで本調査区ないし直近の周辺域で継続していた可能性が高い。これは調査区南側の 8・69 次調査の傾向と同じである。次に②の時期だが、井戸 SE006（IV-1～2期）のほか、堅穴建物 SC010（Ⅲ B期？）→ SC009（古・新）→ SC008 → SC007（IV期？）、SX203・012（IV期？）、溝状遺構 SD005 と SD014 がある。これらはおおよそ方位がそろう傾向にある。那珂遺跡群全体の遺構群が正方位化する（2-10 頁「周辺の地理的歴史的環境」参照）。V期以降の確実な飛鳥時代後半期遺構はない。周囲調査（8・69 次）の成果からは、南北方位の条溝の延長が本調査区にも及ぶ可能性があったが（Fig.3）、そのうち西側溝延長部（8 次 SD003-001、SD004-008-009）は擾乱が激しく削平されたとみられ、東側溝延長部（8 次 SD001-69 次 SD036）は SD001 と落込み SX002 により消失した可能性がある。しかし後世遺構や擾乱などからは、先行するⅢ A期や、②以降の V～VII期（飛鳥時代後半期～奈良時代初頭）の須恵器が認められる。初期瓦も若干ながら存在し、南側の 8 次 SD001 である程度まとまった出土量があることから、比較的近隣のどこか（西側か）に初期瓦を葺くような建物が存在した可能性がある。③の時期は明確なものは SD015 のみである。しかしこれも後世遺構（SD001、SX002）に一定量当該期の遺物が存在するので、もう少し遺構が展開していただろう。周囲を見ると、8 次 SD002 = 69 次 SD037 の同一時期の溝と直交方位であり、あるいは方形の屋敷地を開む溝の一部であった可能性がある。その範囲は SD015 の延長が 43 m 以上、8・69 次溝延長が 57 m 以上で、その場合想定される南東隅角部は 24 次と 69 次の間になる。④は戦国時代後半期（16世紀）掘削と推定される SD001 があり、近世初期までは何度か掘り直しがなされたとみられる。SD001 の西側上端（肩部）のやや西側には柱穴列が認められ、柵列の可能性がある。他の遺構はないが、東側が低く西側が高くなる地形の変換線に掘られた SD001 は、柵列の存在可能性も合わせて、戦乱の世に備える城館の一部であつただろう。この堀は、南東側は少なくとも 69 次の南東端まであと 60 m 以上続いており、北側もまだ続くから、相当な規模の城館が存在したことになる。今回の調査の土層断面の観察や 24 次（SD001-002）で顕著に判明したように、大規模な掘り直しが途中で行われている。那珂遺跡群では当該期の堀（壕）が走り、相互関係についても整理検討する必要があるだろう。

このように那珂 156 次調査では、弥生時代中期以来の集落遺構の消長と土地利用の変遷をとらえることができた。これは周辺の調査と合わせ、那珂遺跡群全体の土地利用の変遷の復元に資するものであり、地域の歴史を明らかにする基礎的作業となつたと言える。

また、特に②の時期（古墳後期後葉～飛鳥時代前半期）が注目され、別項を設けて考察したい。

2. 環境の変遷について～植生変遷解明のためのデータ蓄積の必要性について～

今回の調査では、井戸 SE006 の下層覆土について土壤サンプルを採取し、当時の周辺環境復元に関する情報を得るために、周辺植生復元に適した花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。結果としては、採取した覆土（埋土）の花粉化石の保存状況があまり良好ではなかったので、望んだよ

うな結果は十分には得られなかった。結果論であるが、より湧水レベルに近く滞水状態で花粉化石などが残りやすい下層の井戸側内覆土を採取してサンプル提供できればより適切だったと思われる。

今回この自然科学分析委託を行おうと考えるに至ったのは、古墳時代後期から飛鳥時代の「那津官家」の時代に関するそのような環境復元のためのデータがあまり無かったからである。比恵・那珂遺跡群の弥生時代から古墳時代前期については、花粉分析や種実同定によるデータ蓄積があり（「Ⅲ、自然科学分析」引用の野井英明 1991・1992、および比恵 100 次報告書＝市報告第 956 集）、植生変遷推定からの自然環境変遷の考察がある（田崎博之 1998）。しかし、古墳前期後半に比恵・那珂の集落が衰退した後、古墳時代中期にわずかな居住痕跡しかない時代があり、その後剣塚北古墳の築造や、東光寺剣塚古墳の築造を経て、「那津官家」の造営があり（比恵 8・72 次、109・125 次ほか、2・10 頁「周辺の地理的歴史的環境」参照）、飛鳥時代には初期瓦を伴うような初期官衙を含む特殊な遺構群（「都市」と言つてもよい）が広がる過程において、植生変化があるはずだということが前提としてある。しかし弥生時代と異なりそれを裏付けるデータがない。これを解明するためには花粉分析などの自然科学分析が必要であり、井戸埋土下層には花粉化石などが遺存している可能性があるため、今後意識的に採取し分析していく必要がある。このためには、古墳後期から飛鳥時代だけでなく、古墳前期以降の通時的なデータが必要であり、これらの時期の井戸や低湿地遺構が発見された場合には、サンプル土壤や自然遺物の採取がます必要である。弥生時代以来の「都市的」遺構群（久住 2008a・2009）が衰退して遺構が激減した古墳前期後半～中期には、植生が回復して二次林が一部に形成された可能性もあり、それが東光寺剣塚、那津官家の倉庫群や初期官衙が造営される過程で、再度弥生後期から古墳初頭にみられるオープンな植生に戻った可能性がある。こうした想定を実際の分析データで検証し、あるいは修正していく必要がある。

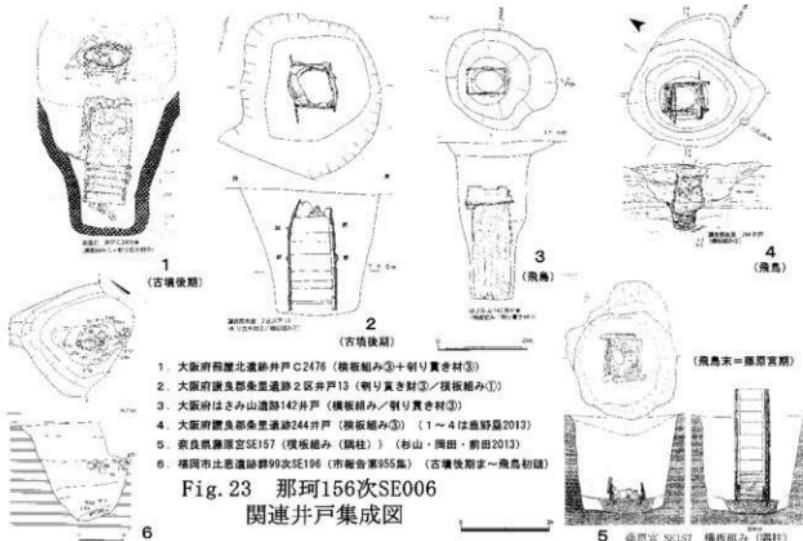
3. 井戸 SE006 に関する考察～飛鳥時代の比恵・那珂遺跡群小考～

井戸 SE006 は、一部不十分な過程もあったが、比較的詳細な調査と観察を実施することにより、方形板組（横板組）井戸枠と円形削り貫き井戸側の複合的な組合せの状態を推定復元するに至った（Fig.7～9）。この復元案には若干の疑問もあるが、少なくとも方形枠と円形井戸側の複合的な組合せであったことは認められるだろう。さらにこの最下部に砂利を厚く敷き詰め過層とするという入念な構造となっている。このような井戸構造は、畿内中枢部（飛鳥・難波とその周辺）でも飛鳥時代後半期以降は多くなるが、それ以前はそれほど多くない。全く同じという構造はないが、井戸枠・側の組合せという観点では、河内（大阪府）の藤屋北遺跡井戸 C 2476（古墳時代後期）、讃良郡条里遺跡 244 井戸（飛鳥時代）などがある（Fig.23、鹿野豊 2013）。また底面碟敷構造というのも古墳後期から飛鳥時代も存在するが意外と少なく、藤原宮 SE157（Fig.23）などに代表されるように藤原宮期に一般化する（杉山拓己・岡田雅彦・前田俊雄 2013）。したがって、当該期では畿内中枢部でさえ一般化していない井戸枠・側構造（底面の砂利層＝碟敷構造を含む）が、飛鳥時代の初頭（IV-1～2 期）というかなり早い段階に比恵・那珂遺跡群に存在するということ自体が非常に大きな意義を有している。

井戸構造だが、推定方形板組は隅部の木質痕跡土層の観察から、「井」字状の組合せではなく、「エ」字状の組合せとなる。隅柱痕跡は認められなかっただので、「積み上げ式横板組型井戸」（鍾方正樹 2013）の「相欠き C 類」か「枘差し（通し枘）」タイプ、もしくは「井籠横板組」構造の隅角で組み合う一方のみが外側に突出するタイプかのいずれかであろう。ただしこれらの確実な出現は飛鳥時代末期頃とされており、板自体が遺存しない本調査事例の推定復元には疑問を持たれる方もいるかもしれない。ただし横板組で「積み上げ式」タイプ自体は、古墳時代中期の渡来人に関わる遺跡（韓式系土器多数出土など）において河内では古墳中期中葉に出現し（久宝寺遺跡 SE5002）、後期にはこれが多段化する例

がある（藤屋北遺跡井戸C 2476）。同じく古墳時代後期には、隅角の横板の組合せで、「相欠き」や「柄」が認められない（鹿野豊 2013 の「横板組①」）、讃良郡条里 2 区井戸 13 (Fig.23、古墳時代後期) のような平面「立」状の横板組み上げ式井戸枠もある（鹿野 2013）。この例などは那珂 156 次に近く、これに割り貫き井戸側を挿入すれば同じようなものになる。そのため、「横板組型井戸」が導入された後に、すでに多様な変化がある可能性があり、今回想定復元した構造はありえないと言えまい。いずれにしても、比恵・那珂では畿内やあるいは朝鮮半島の井戸構造の情報がダイレクトに入っているものと考えられる。調査区内出土の新羅土器細頸壺の存在 (Fig.20-10) も考慮すると、あるいは朝鮮半島からの直接的な情報や井戸構築技術の伝播かもしれない。これは今後の検討課題である。

比恵・那珂では、弥生時代中期～古墳時代前期の井戸が突出して集中的に掘削・構築されていることが判明している（久住愛子・久住猛雄 2008）。古墳前期後半以降、後期初頭（須恵器 MT15 期）までは、比恵・那珂での集落遺構自体が少なく、井戸の構築もわずかである。ところが古墳後期前葉～中葉（ⅢA 期、TK10～MT85 期）になると集落遺構が増加し始め、井戸の掘削も始まったようである。ⅢB 期（TK43 期）には、再び井戸の構築数が他の遺跡に比べて明らかに多い状態になり、それは奈良時代まで続く。比恵・那珂における古墳時代後期から飛鳥時代（MT15 期～VI 期）までの井戸をまとめた（表 5）。最近 5 年間の調査報告事例の遺漏がある可能性があるが、確認したものは 32 例である。ⅢB 期に増加し（3 基）、IV 期前半が多く（12 基）、IV 期後半は 4 基、V 基は 3 期、VI 期は古相が 2 基、新相が 1 基である。「ⅢA 期～ⅢB 期」はⅢA 期に、「ⅢB 期～IV 期古相」はⅢB 期に、「IV～V～VI 期」は IV 期古相に、「IV 期新相～V 期」は IV 期新相に、「V 期～VI 期古相」は V 期に、それぞれ掘削時期を推定している。井戸数からは、IV 期古相の比恵・那珂の隆盛がうかがえ、同じ頃に那珂 156 次にもあるような一辺 2 m 代の小型堅穴建物が増加し、何らかの人口集中があったことがうかがえる。この点は、「那津官家」「筑紫大宰」などの国家的施設・機関の設置に伴い、非在地的な人々が多く集まつただろうという推定の裏付けとなる。また井戸に初期瓦や覗き窓が発見されている例がいくつかあり、そうした例は比較的大きな井戸か、井戸側が存在した疑いがある掘方形態の井戸であることが多い。井戸枠（井戸側）が



ある井戸については、比恵・那珂で多く検出される弥生時代から古墳時代前期の井戸の大半が素掘り井戸であるため、土層の観察をあまりせずに（調査時の時間的余裕の問題もあるが）半裁せずに一気に掘削してしまう場合が多いので、それと判断された確実なものは少ない。掘り方の大きな井戸や段掘り構造の井戸については、井戸側痕跡がないか精査していく必要がある（柱穴での柱痕や柱抜き跡の検出観察と同じである）。段掘りや井戸底部に円形凹みがある、あるいは方形井戸枠に入るような底面、底面四隅に杭打ちがあるなどの井戸は、井戸枠・井戸側が存在したことが疑われる。実はこれらは弥生時代中期～古墳時代前期の井戸にも少ないと存在する。今後の調査においては、そうした可能性も念頭に入れた調査における精査、平面および土層断面の観察が必要であろう。たとえば、比恵99次SE195（Fig.23）などは掘方底面の状況と遺物の出土状況（井戸枠・井戸側落込み上に遺物が廃棄される）からそうした事例の可能性がある。比恵・那珂における古墳時代後期から飛鳥時代の井戸は、その集中性だけが問題ではなく、個々の構造も問題である。今回の那珂156次調査のような井戸は、その構造の稀少性からかなりの上位層に関わる可能性があるが、他にもそうした事例があるかもしれない。当該期の井戸の調査研究の進展は、「那津宮家」や「筑紫大宰」の実態解明に寄与するであろう。

番号	遺跡名	遺構名	概要	発見場所 （発見位置の 近傍の地名）	発見方法 （発見の手順）	主要遺物群			備考
						主要遺物 （発見位置の 近傍の地名）	付帯遺物 （発見位置の 近傍の地名）	井戸深さ (m)	
1	那珂13次	井戸13	下層は柱穴付の井戸枠 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	3.8	3	無縫合			遺物は主に土器や石器、ガラス器から のもので、主に、より一般的な遺物の 「ハーフピース」が見られるものの多いもの がある。また、既存の井戸枠（奥）（白馬館古井、 瓦）が見られる。
2	那珂13次	SE191	下層は柱穴付の井戸枠 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	4.0	4	○ 無縫合 柱穴			柱枠は、柱穴（柱穴底土、新規枠、廻井古 井）の使用。
3	那珂13次	SE192	下層は柱穴付の井戸枠 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	4.7	13	無縫合 （周辺には井戸底 柱穴付柱穴付）			内壁は柱穴付の柱穴付のもので、外壁は既存の 柱穴付柱穴付のものである。
4	那珂13次	SE193	V字	2.8±1.1 （廻井古井）	1.1	無縫合			柱枠は既存柱
5	那珂13次	SE195	既存枠	3.4	4	無縫合 （廻井古井）			土壁・柱枠、竹状構造物など
6	那珂13次	SE196	下層は柱穴付の井戸 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	2.4±1.1	18	上層は柱穴付の井戸 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）			既存の柱枠（廻井）があるが井戸枠の 一部。
7	那珂13次	SE197	下層は柱穴付の井戸 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	1.8	13	無縫合			柱枠は、古代瓦器、 下層の方ではやはり井戸枠の可能性
8	那珂13次	SE198	既存柱・既存枠	1.7	1	（廻井古井）柱穴付 柱穴付柱穴付			柱枠は既存柱の上に 柱穴付柱穴付が設けられる。井戸枠の認定ほか？
9	那珂13次	SE199	柱穴付柱穴付	1.0	6.0	無縫合			廻井の場（廻井田）
10	那珂13次	SE200	既存柱・既存枠	1.0	1.2	無縫合			
11	那珂13次	SE208	V字	1.0	0.5	無縫合			
12	那珂13次	SE209	既存柱	0.9	0.5	無縫合			
13	那珂14次	SE-201	下層は柱穴付の井戸 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	2.0±1.0	2.0	（廻井古井）柱穴付 柱穴付柱穴付			柱枠は既 存柱付の柱 枠付からなる井戸枠で既存した可能性 性あり（廻井古井）
14	那珂14次	SE-202	V字	1.0	0.5	無縫合			
15	那珂11次	SE008	V字	1.0±0.5 （廻井古井付で なっている）	1.0	（廻井古井）	+		「たき井の場（廻井）」の土器と柱穴付 柱穴付柱穴付で、柱穴付柱穴付が見られる。
16	那珂14次	SE009	既存柱・既存枠 既存柱	3.2	13	無縫合	無縫合		方型柱・内壁付柱の组合せび下 層は柱穴付柱穴付
17	北畠3次	34年井戸 F-2-3層	柱穴付	3.0	2.4	無縫合 （廻井古井）			柱枠は既 存柱付で既存柱付の柱穴付とともに 柱穴付柱穴付で、柱穴付柱穴付が見られる。 柱穴付柱穴付が見られる。
18	北畠4次	35年井戸 F-2-3層	柱穴付	0	1.0	無縫合			1/4階分 「たき井の場（廻井）」
19	北畠4次	SE010	既存柱・柱穴付 柱穴付柱穴付	3.0	2.0	無縫合 （廻井古井付柱穴付 柱穴付）	+		既存柱・柱穴付柱穴付の柱穴付と 柱穴付柱穴付が見られる。柱穴付柱穴付 柱穴付柱穴付が見られる。
20	北畠4次	A井-010	既存柱・柱穴付	1.0	1.0	無縫合			既存柱付 柱穴付柱穴付
21	北畠5次	C井-010 F-2-3層	2.3±1.7	1.00	無縫合	+		中央付柱 柱穴付柱穴付	
22	北畠5次	SE011	既存柱付	1.00	1.0	無縫合			既存柱付（既存柱付）
23	北畠5次	SE012	F-2-3層	2.0	2	無縫合 （廻井古井）			柱穴付柱穴付から既存柱付・既存柱付が見ら れる F-2-3層の既存柱付（土壁付）
24	北畠5次	SE013	F-2-1-3層	0	1.0	無縫合			既存柱付 既存柱付
25	北畠5次	SE014	上層は柱穴付の井戸 柱穴付で、柱穴から （当戸内・4階前室 の柱穴も含む）	0	1.0	無縫合	+		既存柱付は既存柱付から既存柱付がある。 柱穴付柱穴付
26	北畠5次	SE015	既存柱付	-1.2±0.7	0.7	無縫合			
27	北畠5次	SE016	既存柱付	1.00±1.0	1.0	無縫合 （廻井古井）			土壁付柱穴 既存柱付
28	北畠5次	SE018	既存柱付・既存枠	2.0	2.2	無縫合			柱下部は既存柱付の可能性
29	北畠5次（本年度）	番1	柱穴付						無縫合
30	北畠5次（本年度）	番2	柱穴付						無縫合
31	北畠5次（本年度）	番3	柱穴付						無縫合
32	北畠5次（本年度）	番4	柱穴付						無縫合
33	北畠5次（本年度）	番5	柱穴付						無縫合

表5. 比恵・那珂調査における古墳時代後期～飛鳥時代の井戸一覧

（国費文化財研究会編2013年：井戸調査の報告書を参考。参考しておき、全て報告書を参照のこと。映像が異なるものは複数、一部加筆し、また追補を追記した。特に時期は出土遺物をもとに全面的に表現した。報告では「古墳後期」となっているものはF-2-3層・飛鳥時代初期が多い。また「古代」に飛鳥時代のものがある。なお、最近の調査報告例は過半数があるかもしれない。）

<引用文献>

- 石木秀啓2017「西海道北部の土器生産」『徹底追究！大宰府と古代山城の誕生』九州国立博物館「大宰府学研究」事業・熊本県「古代山城に関する研究会」事業合同シンポジウム資料集
- 海野聰・小田裕樹2013「都城の形成と井戸」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集、埋蔵文化財研究会
- 小田和利2014「磐瀬宮における諸問題」『九州歴史資料館研究論集』39
- 小田富士雄1964「九州の須恵器研究序説」『九州考古学』22
- 小田富士雄1977「豊前地方における須恵器」「天觀寺山窯跡群」北九州市埋蔵文化財研究会
- 鍾方正樹2003「井戸の考古学」ものが語る歴史シリーズ⑧、同成社
- 鍾方正樹2013「6～7世紀における井戸枠の構造と変化」『続・井戸再考』第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
- 久住愛子・久住猛雄2008「九州I（福岡県）—福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について—」「井戸再考—弥生時代から古墳時代前期を対象として—」第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 久住猛雄1999a「出土須恵器の編年とE-2・3号境の墓造・追跡の年代について」「羽根戸南古墳群」福岡市報告第661集
- 久住猛雄1999b「弥生時代終末期「道路」の検出」「九州考古学」第74号、九州考古学会
- 久住猛雄2008a「福岡平野・比恵・那珂道跡群—列島における最古の「都市」—」「集落からむしよ弥生社会」弥生時代の考古学8、同成社
- 久住猛雄2008b「九州I 付編 弥生時代中期中頃～終末期古相までの井戸一括基準資料」「井戸再考」
- 久住猛雄2009「比恵・那珂道跡群－弥生時代後期の集落動態を中心として－」「弥生時代後期の社会変化」第58回埋蔵文化財研究集会資料集
- 久住猛雄2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」「九州島の古式土器師」第19回九州前方後円墳研究会（長崎大会）発表要旨集・基本資料集
- 久世康博2001「井戸はどうして埋められたのか（石を入れる）」「考古学論集」第5集、考古学を学ぶ会
- 胸見和夫1992「井戸をめぐる祭祀—地域的事例の検討から—」「考古学雑誌」第77巻第4号、日本考古学会
- 齋部麻矢1999「北部九州の飛鳥・白鳳時代の瓦」「飛鳥・白鳳時代の瓦と土器—年代論—」帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会共催シンポジウム
- 佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」「大阪歴史博物館研究紀要」第2号
- 鹿野星2013「近畿地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸—大阪府域を中心として—」「続・井戸再考」第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
- 白井克也1998「博多出土高句麗土器と7世紀の北部九州」「考古学雑誌」第83巻第4号、日本考古学会
- 白井克也2004「筑紫出土の獣頭鏡」「九州考古学」第79号、九州考古学会
- 菅波正人1994「那珂道跡群出土の古瓦について」「那珂10」福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集
- 菅波正人1996「那津の口の大型建物群について」「博多研究会誌」第4号
- 杉原敏之「太宰府政府のI期について」「九州歴史資料館研究論集」32
- 杉山拓己・岡田雅彦・前田後雄2013「奈良県の様相」「続・井戸再考」第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
- 高橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」「古代文化」第42巻第4号、財團法人古代学協会
- 田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」「福岡平野の古環境と遺跡立地」九州大学出版会
- 長直信2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産－7世紀を中心に－」「古文化談義」第67集、九州古文化研究会
- 長直信2014「九州における長舎の出現と展開－7世紀代を中心に－」「長舎と官衙の建物配置 報告編」第17回古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所研究報告第14冊
- 長直信2017「西海道の土器編年研究」「徹底追究！大宰府と古代山城の誕生」シンポジウム資料集
- 長洋一1994「新城「太宰府」の成立」「日本の古代国家と城」新人物往来社
- 中島恒次郎1997「7世紀の食器－九州消費地－」「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器－」古代の土器研究会
- 橋口達也1979「堺棺の編年研究」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」XXXI中巻、福岡県教育委員会
- 北嘉えりか2008「初期瓦研究の現状と課題－筑前地域を中心に－」「七隈史学」第9号、七隈史学会
- 舟山良一（編）2008「牛頭窯跡群：総括報告書」大野城市文化財調査報告書、第77集
- 宮本一夫2011「環境の変遷と遺跡からみた福岡の歴史」「新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史」
- 柳田康雄1986「高三瀬式と西新町式土器」「弥生文化の研究」4、弥生土器Ⅱ、雄山閣
- 横田賀次郎1984「福岡県内の出土の硯について一分類と編年に関する一試案－」「九州歴史資料館研究論集」9
- 吉留秀敏2009「鴻臚館から大宰府への道－水城西門ルート福岡市内探索の中间報告－」「市史研究ふくおか」第4号
- 吉村靖徳2003「成立期の太宰府政府に関する試論」「九州考古学」第78号
- 龍孝明・久住猛雄・菅波正人・山崎頼人2013「九州地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸」「続・井戸再考」第62回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集



1. 那珂 156 次調査 I 区全景（南から）



2. I 区全景（南西から）



1. SD001 挖削状況 (北西から)

2. SD001 挖削状況 (南東から)



3. II区全景 (北西から)



1. 那珂 156 次調査Ⅱ区全景（南から）



2. S E 0 0 6検出状況（S D 0 0 1 -IV区）（北西から）



1. SE006上層遺物状況（北東から）



2. SE006井戸側落込み検出状況（北東から）

3. SE006井戸側検出土層断面細部（北から）



4. SE006井戸側検出土層検討状況（北西から）



1. SE006 下層半戸側痕跡検出上面(北西から)



2. SE006 下層井戸側内枠掘削状況(南西から)



3. SE006 下層井戸側内枠掘削状況近景(北西から)



5. SE006 下層井戸側外枠掘削状況(南西から)



4. SE006 下層井戸側外枠掘削状況(西から)



6. SE006 最下層上部凝灰岩出土状況(南西から)



7. SE006 最下層上部凝灰岩出土状況近景(北西から)



1. SE006 最下層砂利層上部検出状況（南西から）

2. SE006 完掘状況（南西から）



3. SE006 最下層砂利層上部検出状況(南西から)



4. SE006 最下層砂利層上部検出状況近景(南から)



5. SE006 最下層砂利層半截土層（北から）



1. SE006 完掘状況（北東から）



2. SD001-I 区南側土層（北西から）



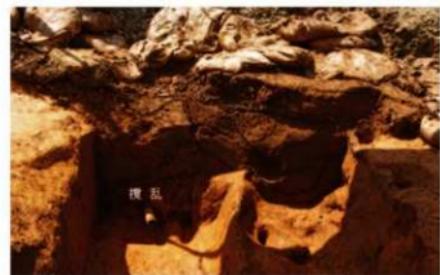
3. SD001-I 区北側土層（南東から）※図無し



4. SD001-II 区北側土層（南東から）

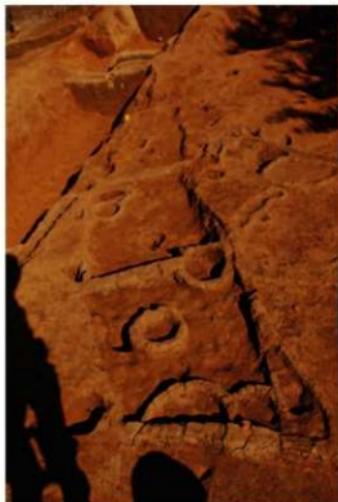


5. SD001-V 区南側土層（北西から）



6. II 区 SD001-VII 区北側土層（南東から）

7. 反転後 II 区 SD001 延長上面
検出状況（南東から）



1. SD005 振削状況（東から）



2. SC007,SX010,SD005 振削状況（南西から）



3. SX003 風倒木痕？（北西から）



4. SX002- I 区南トレーニチ 1 土層（北西から）



6. SX002-II 区北トレーニチ 4 南土層(北西から)



5. SX002- I 区北トレーニチ 2 北側土層（南東から）



7. SX002-III 区南 トレーニチ 5 南側土層
(北西から)



8. SX002-IV 区南 トレーニチ 6 北側土層（南東から）



1. I 区中央～北西調査状況（南西から）



2. 調査区工事前現況写真（東から）



3. 表土掘削終了状況（南東から）



4. I 区作業風景（北西から）



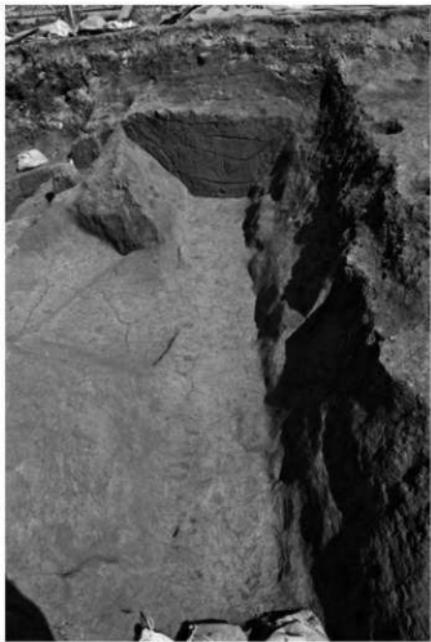
5. SE006 上層須恵器横瓶検出状況（北東から）



1. SE006 最下層掘り方須恵器出土状況（北から）



2. SE006 最下層砂利層半截状況近景（北から）



1. SD001-I・II区間完掘状況（北西から）



2. II区 SD001 延長掘削状況（南東から）



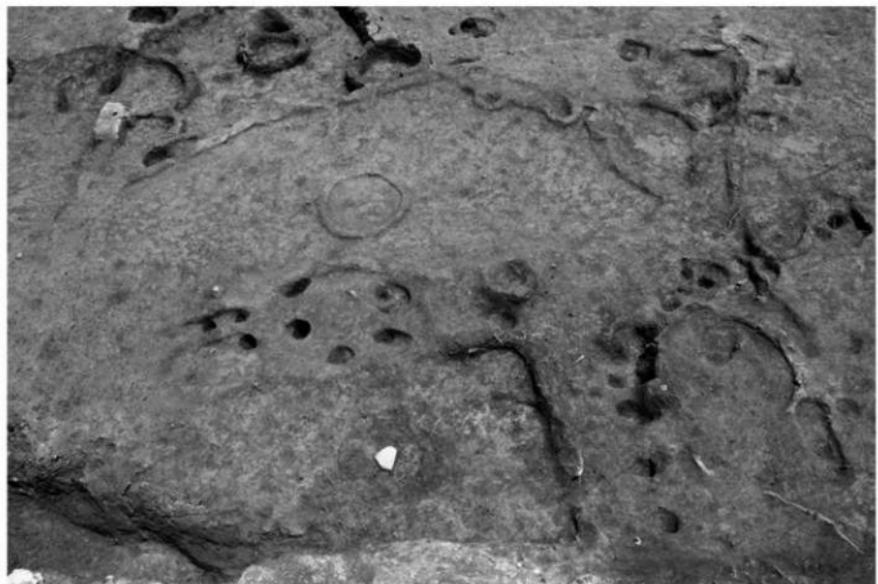
3. SD005 完掘状況（西から）



4. SC007 掘削状況（南西から）



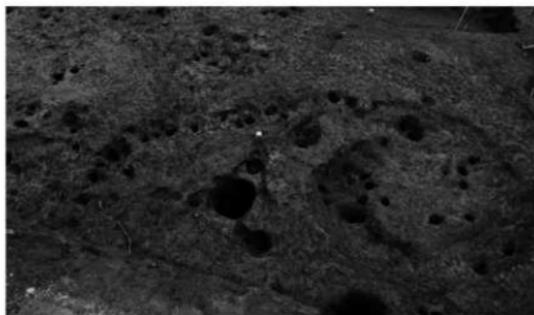
5. SC007・009周囲掘削状況（北東から）



1. SC007・008・009周囲ベルト除去後掘削状況（南西から）



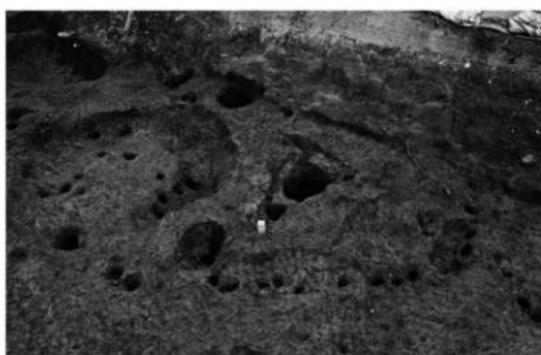
2. SD005、SC007・008・009下部、SX081北半完掘（南西から）



1. SX081 確認掘削状況（南西から）



4. SX002- トレンチ 5 掘削状況
(北東から)



2. SX081 確認掘削状況（北から）



5. SX002- トレンチ 6 掘削状況
(北東から)



3. SX002- トレンチ 2 掘削状況（北東から）



6. SX002-II 区南部上層鉢状鉄製品出土状況（北西から）



1. Fig.28-1 (須恵器平瓶)



2. Fig.28-2 (須恵器平瓶)



7. Fig.20-8 (円筒埴輪片)



3. Fig.18-7 (須恵器坏身)



4. Fig.18-10 (須恵器坏身)



8. Fig.18-9 (須恵器坏蓋)



9. Fig.21-18
(八女産?須恵器坏身)



5. Fig.18-12 (須恵器坏身)



4. Fig.18-13 (須恵器坏身)



10. Fig.21-7 (円筒埴輪片)



11. Fig.28-10 (新羅土器?壺)



12. Fig.22 (凝灰岩製石製品?残欠)

報告書妙録

ふりがな	なか76ーなかいせきぐんだい156じちょうさのほうこくー		
書名	那珂76		
副書名	—那珂遺跡群第156次調査の報告—		
巻次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1312		
編著者名	久佐猛雄		
編集機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667		
発行年月日	西暦2017年3月27日		
遺跡名ふりがな	なかいせきぐんだい156じちょうさ		
遺跡名	那珂遺跡群第156次調査		
所在地ふりがな	ふくおかはかたくたけした3ちょうめ1ばんちない		
遺跡所在地	福岡市博多区竹下三丁目1番地内		
市町村コード	40132		
遺跡番号	0085		
北緯	33度34分23秒 (世界測地系)		
東経	130度26分5秒 (世界測地系)		
調査期間	2015.5.1~2015.7.31		
調査面積 (m ²)	353m ²		
調査原因	下水道施設建設工事		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代	唐状遺構（飛鳥時代、中世前期、飛鳥時代～江戸時代）、井戸（飛鳥時代前期）、堅穴住居（弥生時代？、飛鳥時代）、垂ち込み（谷部造成）遺構（江戸時代以降）	弥生土器、占式土器類、占墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代の土器類、須恵器、中世（平安時代後期以降）の土師器、土師質土器、輪入陶器、国造陶器、近世（江戸時代）の土師質土器、四足陶磁器、占墳時代後期の円筒埴輪片、瓦代（飛鳥～奈良時代）の瓦片、占墳時代後期の範天岩製石製品、奈良・中世の滑石製石繩片など出土量はコンテナケース計10箱
特記事項			
確実な弥生時代遺構はないが、円形窓穴付居があった可能性がある。弥生土器片が調査区から多く出土した。古式土器窓（古墳時代前葉の土器）も若干の出土があり、本来弥生時代～古墳時代前葉の遺構があつた可能性が高い。			
飛鳥時代の堅穴住居、溝状遺構、井戸を検出したほか、遺構に伴わない飛鳥～奈良時代初期の土器が出土した。飛鳥時代の井戸は、土層観察から万形の円錐板、内側に羽賀の井戸側が多重に組み合わされた構造と推定された。さらに、下層に津化用の砂利層があるもので、この上より金全なり作業は同時期の畿内の飛鳥や難波地区などで限定される。「郡津官家」や「筑紫大寺」に關わる、畿内から出土した。特別な階級の「官人屋」の居住区を想定した。また井戸最下層に埋葬された姫灰岩製石製品は、近くにある東光寺跡原古墳に樹立された石製樹枹（樋、板など）の残欠の可能性がある。			
飛岡時代末期の罐は、調査区東縁の落ち込みに沿って掘削され、周辺調査からも南北に広く延びると考えられる。西側の一箇高い輪間に破壊が想定される。			
調査区東側の落ち込みは、ちょうど現在に統く道路に一致しているが、おそらく近世に自然地形の谷部をさらに造成したものと推定できた。近世以前、切り通し状の地形の西縁（調査区の東縁）に、何度も削灌なし水路を掘削している。水路兼道路側溝としての機能を考えられる。			

那珂 76

—那珂遺跡群第156次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1312集

2017年3月27日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印刷 株式会社大里印刷センター
福岡市東区二ノ瀬新町12-29